實に「天體觀測」「醫學講義」であるのである。作句それ〴〵の取材としてゐたところが、既に同日の論ではない。

ぜすきりしと踏まれ踏まれて失せたまへり　秋櫻子
ある谷は木苺咲くよ蕗の上に　同
胡蝶蘭たれたり魚は紺青に　同
木曾谷は葛咲かせたり瀨々の岩に　同
渦潮の鮑を得たり蜑が手は　同
脈にふれ眼はおもむけり蓮の花に　同
落葉松の西日のキヤンプ道の邊に　同
驚けば鵙は鳴きすぐまなかひを　同
蟋蟀は見のあらはなりみそはぎに　同
落葉焚今朝はするなりこの畑も　同
山鳩やたそがれ白き梅の梢に　同
馬醉木咲き硫黄の華も道のべに　同
強東風の鷗はとべり波の穗を　同
桑の蟬鳴きいで雷は遠空に　同
鵙きくは愉しくあらし朝なれば　同
野火止めの水音落葉降る中に　同

もつて其の一般を知るに足るであらう。其のタッチの新鮮さに於いて、リズムの流暢と柔らかさに於いてまさに近代的異色を示すものがあるのである。尠くとも一句それ〴〵の調べの上では當時の新傾向句のそれのやうにどことなくきうくつなものが膠着したことをば離れて、秋櫻子氏が云ふごとく軟らかい感じを與へるところがあるに相違ない。しかも尙既往新傾向の鹿島立ちと對照してみて、何となしに一脈相通ふものあるを感ずるのは怎うしたものだらう。此の著者が主宰するところの「馬醉木」を見るに、秋櫻子氏及同人作句、五月號には十五氏百句中佐々木綾華氏の作句にばかり「かな」が二句あつたのみ、他の九十八句は「かな」もなければ「けり」も無い。六月號には九十一句中塚原夜潮氏の唯一句。七月號には百〇一句中「かな」も「けり」も一句として見當らない。

俳句といふ文藝制作の上に「かな」を用ゐ、時に又「けり」を使用したところで、文字そのもの

が決して月並でも何でもあるべき筈がないことをよく承知するであらう秋櫻子氏及一派の人々が、俳句文藝に對する考へ方が、五七五調の基格を破つて快とするものでもなく、季題を排して其處により天空開濶の世界を發見するものだとするものでないことは、前にも鳥渡觸れたやうに、平常の所說と實際制作の上に吾人はこれを肯く。氏としての意嚮はほゞうかゞへないことはない。かならずや學究的態度と持ち合せた天分とが、自分自身をば將來あやまたしめぬだらうと思ふ。それどころか、餘りに一局々々に偏しすぎて量見のせまいことおびたゞしい俳壇にあつて、恁うした新鮮な感じを與へる行き途をとつてゐる氏の業蹟を思ふことに於いて欣快の情人一倍である。誰かしらかういふ人がなければ俳壇は豆のやうに小さく固まつて終ふのである。

先般「馬醉木」誌上で、師虛子翁を向ふに廻して「見てゐてもらひたい俳壇は我々の手によつて必ず良いものにしてゆくから」と豪語した豪語甲斐が漸次あるだらう事を吾人も知つてゐる積りである。此の豪語に一寸觸れておけば、――私は誌上で其の言分を見たとき師に對する毒舌の感じをば毫も受けず、秋櫻子氏その人の信念とさうして叡智を感じた。俳句で生涯をつらぬく信念、社會の思潮を分明に觀る叡智。萬一にも俳人にして其れの皮相をみてとつて嗤ふ者があつたとしたならばなつてはゐない。お互ひ社會に生存する以上、何かしら感情のゆきちがひはあるであらう。親子でも、兄弟でも同じやうなものだが、ことに他人と他人とが附き合つた師とか弟子とかいふ關係からゆくと、感情は相當微妙に働いて恰度である。要は、師に對して一番の報いは、大いに師を凌駕して後世にまで出藍の譽れをのこすことである。碌々として爲すことなく惰眠するが如きは論外、師が亡くなりでもしたなら、羅針盤を失つた船のやうに、俺のゆくところは何處だらうと悲鳴をあげたりする輩が若しありとするならば、それこそ禹愚の骨頂である。

さて、其處で秋櫻子氏の新機軸をひらかうとする文藝工作に對して、充分の理解と人後におちざる同情とを持する私であるに相違はないのだが、たゞ一つ「新樹」に卽して云つてみたいと思つたことは、左の如き句に就いてゞある。

利根あれぬこゝは鮠つる人居るに　秋櫻子
ある谷は木苺咲くよ蕗の上に　同
水照りに羅府の夏日をわが思ふ　同
熱帶魚見惚るゝ顏のいとまあれや　同
木曾谷は葛咲かせたり瀨々の岩に　同
鯉の苞蓮の莟と厨邊に　同

蟋蟀は見のあらはなりみそはぎに　同
崎ゆけば柚子たわゝなり家毎に　同
利根川に白浪立てり東風吹けば　同
強東風に鷗はとべり波の穂を　同
月見草萠ゆるを見たり崎のはてに　同
脈にふれ眼におもむけり蓮の花に　同
すでにして鰡の高潮垣の下に　同
徑ゆくやなほいかづちの雲の上に　同
鵙きくは愉しくあらし朝なれば　同
渦潮の鮑を得たり蜑が手は　同

といふやうな諸作。

秋あさし海ゆく雲の夕照りに（背戸の竹の葉うす明りする）　若山牧水
澤蟹の水にそばゆる日の照りは（山葵田ながら悲しかりけり）　北原白秋
山葵田はのり來る水の淺々に（くゞりさばしり根ごと石置く）　同

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに（白ろうつらん山ざくら花）　若山牧水
凌霄花の蔓芽のびつゝ竹棚に（つゆづく雨のびしよびしよと降る）　飯田莫哀
白つゝじ二つ咲きそめてせまき庭は（つゆけたへなり曇りたる空）　高田浪吉
石徑へかたむく山の山吹は（ほどろ〳〵に咲くが閑けさ）　清水比舟
春日照る峠を越えて蘆の湖の（さゞ波すがし吾に寄るがに）　今井邦子
あしび持ちて坂下り來る僧にあひ（奥への道を又とひにけり）　石榑千亦
わがこゝろ動くともなく青草に（寢居つゝ空の風にしたがふ）　若山牧水
秋の雲柿と榛との樹々の間に（うかべるを見て人も語らず）　同

こうした短歌は尙いくらでも擧げることが出來やうけれどもさて此等の短歌の上ノ句と、前掲「新樹」から摘出した「利根あれぬ」以下十數句それらが、どれだけの距離をもつてゐるかといふ疑ひである。短歌それの上ノ句がおのづから、たとへば、

水の音に似て啼く鳥よ山櫻（松にまじれる深山の晝を）　若山牧水

の如く俳句の態を做してゐる場合、それは疑ひなく、一個の俳句と見做して、若しこれを故牧水が俳句として獨立させやうとも差支ない。（形式上俳句からは短歌はあり得なく、短歌からは俳句

がこのやうにあり得る）だから、短歌ばかりから俳句があり得る上で、上ノ句の俳句との距離といふことは、この二つの文藝作品を取扱ひ檢討する上に重大な關りを持つ。從つて短歌側には影響せないとしたところで俳句のみには直ちに作品それの價値に及ぼして來ることになる。さうしてみると、若し「新樹」の其等の作品が、短歌的に餘りにも上ノ句に距離がなさすぎる場合だつたらどうであらう。

然ういふ疑ひである。

「短歌研究」七月號で、空穗氏の歌集「さゞれ水」の合評をしてゐるが、そこで秋櫻子氏は、恁ういふことを云つてゐる。

「俳人である私が『さゞれ水』の讀後感を書くとは不思議に思はれるかも知れないが、これには多少の因緣が存するのである。大正九年から三年間ほど私は窪田先生に作歌の教を受けて、俳句と短歌と兩方の勉强をしてゐた。それが十二年以後俳句ばかりを作るやうになつて、自然先生の御宅へあがる機會もなくなつてしまつたのである。」

これに照らして、三年間の短歌修業といふのが、どこかへ打つて出なければならぬものであるといふことは何人にも首肯出來るところである。すなはち、上述の經緯とするところは爰にはつきりするわけである。

こう私は言ふけれども、これが徒らに作家秋櫻子を漫罵攻擊したりするのではない積りである。なぜならば前にも云ふ如く現在の些々たる手觸りは手觸りとしたところで、極めて廣汎な意味に於て新らしい藝術運動の過程は、常に完璧たるを保しがたいし、若干は吾人も亦體驗をもたぬものでない立場であることゝ、これが藝術運動の眞實性を把握する點も決して尠いものではないからである。たゞ私をして苦笑を禁じ難からしめるところのものは、かうした秋櫻子氏等の足どりが結局どこへ落ち着いてゆくかの、考察を加へる事なしに無批判で、雷同してゆく者にたま〳〵見向かされることである。それでも、秋櫻子氏謂ふ所の、良き俳句の世界へ參加し得られないことはないのだからをかしくなるのである。

秋櫻子論にばかりひどく膠着してしまふのは、これのいでたちではなかつた。その著作を批判するに當り前のことだと云へば云へるものゝ、それには尙幾多の遺漏がある。で、終りに、集中、もつとも敬愛に値するところの制作を擧げてみることにする。

日輪のかゞよふ潮の鮫をあぐ　秋櫻子

蕗の葉に尾鰭あまりぬ花うぐひ　同

草籠に一人靜も刈られたる　同
ひとつ鳴く蛙のひゞく飼屋かな　同
早稻掛けて蓮のみだれは隱れけり　同
雨に耐へ鯊釣舟の苫ならぶ　同
時計塔日はなごやかに北吹けり　同
鷺群れて生簀に雪を落しけり　同
寄席の灯のともりあはせぬ盆の市　同

等。

「かな」「けり」はおろかのこと如何なる文字によつたところで、內容的に新鮮な味を包容し得ることは、此等の完成した制作に照らして瞭らかである。短歌結構であり長詩も亦結構であり、其の他文藝のいづれの種類のものも甚だ結構であつて、其等一瞥をさへする處なく頑なる不勉强者にして、當來の俳句を夢想する輩をば寧ろ嘲りたい。もろ〳〵の文藝を出來るだけ多く充分に咀嚼しつくして、而して此處に擧げたやうな立派な制作を贏ち得るに至ることはそれこそ眞率な研鑽と强い信念による精進とさうして豐かなる天分とによらなければならぬところである。おもふにこれが

完璧を產むに至る研鑽と歲月とは一朝一夕のなまやさしいものではなかつたであらう。昭和六年秋この方とは云ふものゝ、それよりも前からの土臺が見逃せない。同時に、秋櫻子氏今後の進轉に、私は多くの興味を持つものである。

「もゝちどり」が有する總句數百六十九句は創作家久保田万太郎氏の名に於いて見るとき、やゝ少な過ぎて貧弱な感があるとも云へるし、同時に又、あまりに多過ぎるとも云へるのである。なぜならば、句集一卷の裝幀なり、纔か八十餘頁の紙數に三句づゝを盛つたりしたあんばいが、しぶいものだといへば僅少のしぶさは汲めないこともないが、書冊の感じからいつて甚だもの足らないところがあるからであり、又、創作家としての立場で餘技に類する俳句制作の數からいふと、「梅、馬、鶯」に盛られた芥川龍之介氏のそれは總句數纔かに七十四句。これをもつて遺憾なしとして一代の句集を閉ぢてゐるのである。さういふ點から云ふと、「みちしば」以後又ぞろ澄江堂氏一代制作するところに二倍以上の數字をもつて俳壇にまみゆるところは、偉なる哉その精力とこそいふべきである。

さて、「かな」「けり」の檢査だが、前表に示した通り、秋櫻子氏の「新樹」に較べて、これに

は又「かな」「けり」の洪水である。「けり」の示す二割七厘に驚くなかれ「かな」に至つては實に三割三分三厘をしめしてゐるではないか。池内たけし氏の句集に此の「けり」がどのくらゐ包まれてゐるか、この點に於て俳壇屈指の猛者だらうことを思ふけれども、いまだ檢べても見ない。おそらく其れをも凌駕するものではなからうかと思はれる。

若しも（假りにである）碧梧桐氏が云つた意味で「かな」「けり」の存在が、たゞちに俳句制作の甚だ新らしからざることを意味し「かな」「けり」の見出せざることに大いに新らしい傾向を追ふものでありとするならば、傘雨たるもの、すでに遲れたるに庶幾いと云はねばならぬ羽目に落ちよう。

だが、その考へかたは姑くそれとして、頭初から隨意「けり」句をとつてみると、

彈初の御祝儀の雪ふりにけり　傘雨
繪双六たゝめるをまたひろげゝり　同
双六の賽に雪の氣かよひけり　同
門松に月のなき夜のつゞきけり　同
初會議ストーブ燃えて來りけり　同
きさらぎのめんくらひ凧あげにけり　同
おぼろ夜の花輪車まわりねたりけり　同
春雪のふりしきる際ありにけり　同
春の雪芝生を白くしたりけり　同
大阪の春の入日を見たりけり　同
枯柳うつせる水も溫みけり　同
花の雨風ふきそひて來りけり　同
花の雨はるゝけしきのなかりけり　同

といふやうなもので、この調子は前掲の表に示す通り、二割餘を示してゐるのである。さらに「かな」に至ると三割三分餘を示すわけだから推して知るべしである。煩はしいので「かな」は掲出することをはぶく。

で、掲出したゞけのものに就いてみたとしたところで、この行き途は、全く「新樹」の其れとは違つて、泰然自若として古格を守つてゐることが瞭らかである。さうして此の古格を守つてゐる裡に作家久保田傘雨氏は、一個傘雨氏としての自然なり、人生なりに對する觀法の土臺の上にまざま

ざと個性を窺はせ得るところの俳句と名づけられる、文藝の建設を成しとげつゝあるのである。傘雨氏のこの制作が假りに氏が抱懷する思想に於て、その鋭角をなすものゝ尖端を噛と切りはなしてから之れをば眞の制作にあてはむべく肯定されるものなら、其の切りとつた以外の、廣汎な部面を示すところのものは、卽ち氏に於ける戯曲「雪」であり「みをつくし」であり、「片絲」であり「一周忌」であり「かどで」等々と做さねばならぬ。さうした文藝の味は、直ちに新鮮潑溂たる感じは與へはせない。故芥川澄江堂をして、

「江戸つ兒はあきらめに住するものなり。既にあきらめに住すと云ふ、積極的に強からざるは辯ずるを待たず。久保田君の藝術は久保田君の生活と共にこの特色を示すものと云ふべし。久保田君の主人公は常に道德的薄明りに住する閭巷無名の男女なり。是等の男女はチエホフの作中にも屢〻その面を現せども、チエホフの主人公は我等讀者を哄笑せしむること少しとなさず。久保田君の主人公はチエホフのそれよりも哀婉なること、なほ日本の刻み煙草のロシアの紙卷よりも柔かなるが如し。のみならず作中の風景さへ久保田君の筆に上るものは常に瀟洒たる淡彩畫なり」

と云はしめてゐる。これは吾人の謂ふ思想的廣汎部面としての傘雨的香味の批判であるが、澄江堂はさらに直接、傘雨俳句なるものに觸れてこう云つてゐる。

「僕、曩日久保田君に「うす〳〵と曇りそめけり星月夜」の句を示す。傘雨宗匠善と稱す。數日の後、僕前句を改めて「冷え〴〵と曇り立ちけり星月夜」と爲す。傘雨宗匠頭を振つて、曰「いけません」然れども僕畢に後句を捨てず。久保田君亦畢に後句を取らず。僕の差を見るに近からん乎。」

と。まつたく兩者の差を見得るに相違ないものである。

江戸のなごりは、まことに絶滅しさうでゐて、それこそうす〳〵と仄かにも、澄江堂謂ふところの哀婉の影を曳いてゐるのである。はつきり云へば其處が身上であるのである。

やはり敬愛しうる側のものを擧げるならば、

松すぎの灯影となりし家つゞき　傘雨
雛かざるなかに髪結來りけり　同
かず〳〵の亡き人おもふ蚊遣かな　同
つゞきもの書きはじめたる靑すだれ　同
河童忌の味噌吸物にとりし箸　同

吉原の菊のうはさも夜寒かな　同

朝顔に祭の注連の殘りけり　同

客あり、語

よのつねの縁でありけり秋の暮　同

等。

「雜草園」の跋文を讀んでゆくと、恰度中どころで、はたと自分の俳號に突き當つた、おや！と思つたが別に何でもないことで、昔、船河原町のホトトギス社で、一緒になつたことが書いてあるに過ぎなかつたのだが、その時を回顧してみて、俳人山口青邨氏の印象は、私にとつてまことに稀薄である。青邨氏によればそれが大正十一年で「之が私の俳諧生活のスタートである」と云ふのだから、慥かだらうけれども、さうすると今日まですでに足かけ十三年の歳月を閲してゐるわけだが實をいふと此の間ン、私が常に敬愛の情をもつて眼を通してゐたものは、青邨氏に於ける文章であつた。このことは既に一昨年か拙論「瞥見錄」の中で、その點に觸れて少しばかりものを云ふたことだつたと記憶する。今でも此の作家は文章方面で大成する人物だと信じてゐる。で、正直のところ俳句制作の方では深い關心をもつて向つたことがなく、迂濶にも通りすぎて來てしまつたわけであるが、今日立派な「雜草園」の寄贈をうけて、さて一と通り眼を通してみると、いま其處に迂濶であつたといふ言葉で償ふに足るものが發見されたことが慥かである。

一側面からの觀察の參考として、前掲の表が、兩極をなす「新樹」と「もゝちどり」とを比較するに、多少やくだつたものであるとするとき、此の「雜草園」が、「けり」に八分三厘の數字を示し、「かな」に二割一分餘の數字を示すことが、中庸を持するものであるだけに、數字的刺戟が兩極端のそれのやうに强烈であり得ないけれども、强烈でないだけに此處に汪洋たるものが横はつてゐるのである。この汪洋たるものは、思ひを練るまでもなく標準を示してゐるものであることが明瞭である。鳥渡緣遠いやうなことであるけれども、此の標準をしめすところのものであり、中庸を持する抵の「雜草園」一卷が荷ふ制作價値が、あながち緣遠いわけではなくして、可成りぴつたりとあてはまるのだから面白い。「雜草園」を見るとき、まづ心に乘つてくるところのものは、素直なゆき途である。凡そ藝術を愛好し、藝術を慾求し、藝術を憧憬すれば、これを憧憬するだけそれだけ愛好し慾求するだけ、それだけ情熱の生ま〳〵しいほむらは燃ゆる。吾人は躬自らこのいんざんな長い道をたどつた。花はくれなゐであるに相違ないし、柳は綠りであるに相違ないけれども、

それに情熱をもやすに餘りに生ま〳〵しいほむらを燃やした既往がかへりみられるし、又現在に於いてもこゝに奔馬の手綱を握りしぼつて觀自在の心境、清澄無礙の心境を持するに苦しむのである。それが「雜草園」の作家青邨氏の場合にみると、藝術を捧持するに、まことに素直であり、水によつて蛤を得、樹によつて蟬を捕ふるが如く、尋常普通であり自然である。樹によつて蛤を得んとするが如き感じは毫も見られない。見るからにけば〳〵しい繪の具をべた〳〵とぬる抵のものでもなく、一見古色蒼然たる陰影と細線をもつてして幽情をひく側のものでなかつたことが、やゝもすれば關心にそくばくの距離をおかしめやうとする處であつたことが解る。

何かある烽火揚りて晴れし秋　青邨

と、大正十一年やつと云ふと、雜草園氏初學入門の卷に於いて詠ひいでゝゐるが、これの尋常普通さ——調べの素直さなり、巧を弄し奇をもとめない境地。しかも背後にそなふる詩的なたましひの坐りどころは慥かなものである。これがずつと氏を通して一貫してゐることが受けとれる。

誰かの句集の序かなにかで虛子翁が「尋常普通の取材によつて平明稀に見る俳句をつくつてゐるが、恁ういふ作家が大成するに近い」といふやうな意味を述べてゐたことが微かに記憶されてゐるが、いたづらに平明たり安易たり、尋常普通たるに於いては、文字通り平凡に終始する運命より脱

することゝは難からう。要はその背後のものである。背後に儼乎として存する詩的氣魄でなければならぬ。

雜草園氏に與ふるに虛子翁はその序に於いて「其の天分、學殖等に依ることは勿論であるが、又努力の賜といはなければなるまい」との辭を以つてしてゐる。それに相違ないのだが、第三者的批判に於て、「凡兆小論」によれば虛子翁は、ぼろくそに言ふほどでなくとも尠くとも芭蕉の貫祿をずつと下げてから凡兆の力量をこそたゝへ過ぎてゐる。凡兆の或る程度たくみなる（或はたくみならざる）平明安易なる客觀的句境と、芭蕉後期の平明なる句境とは、風貌やゝ相似たるものがたま〳〵有るけれども、凡兆の平明な客觀描寫と芭蕉の其處に至る客觀描寫とは、似て非なるものがあきらかに潜在する。それは私の云ふ背後にひそむものゝ違ひである。吾人は、その氣魄を持する芭蕉に心から頭を下げるのだが、虛子翁これをいさゝか癪だと感ずるが如くである。

凡兆を大いにひいきするところの虛子翁自身の作句生活的過程には、

遠山に日のあたりたる枯野かな　虛子

が印されてゐると同時に、

天の川の下に天智天皇と臣虛子と　虛子

初空や大惡人虛子の頭上に　同

句碑

この松の下に佇めば露の我　同

が、相當な足踏みでのこされてをる。凡兆一代の句集は、どこの隅を楊子で探したところで左樣な影だも發見されるものではない。故に、凡兆をたゝへる虛子翁その人は、案外にも凡兆系統に屬せずして、そのいさかは癪なりしところの芭蕉系統に屬する俳家たることは火をみるよりも瞭らかである。この縱橫無盡の俳家虛子翁をば、遠き昔、正岡子規は看破してをることは、故人の小著述「俳諧四年間」に於てはつきりする。かゝる俳家虛子翁が云ふて「又、努力の賜といはなければなるまい」とする。批判の批判を君知るやである。

「雜草園」の著者、青邨氏の過去十有餘年に亙る俳句生活なるものは、凡兆側へ屬せしむべきか、抑ゝ又芭蕉へ屬せしむべきかと鑑考するに、その何れへも屬せしめがたい。同時に、凡兆的旗幟をひるがへしてその實「初空」を產み「天の川」を產み「露の我」を產むところの近代芭蕉的虛子でもあり得る翁が、プラスされたる臺上にひき据えられなければならない。加之、まがうかたなく近代人たる雜草園氏である。波瀾曲折に富む句道精進の俳家惜春居士高濱翁が、力をあはせて、時に羅針盤たり、氏に於いては、海ゆかばみづくかばねの眞つ精進は、まことに純粹に（或は複雜に）正道をすゝませて來たのである。

敬愛の念をおくり得る側の作、數句を爰にとりあげてみると、

雪かゝり星かゞやける聖樹かな　青邨

妻活けし馬醉木の花や西行忌　同

みのりたる田に行燈や秋祭　同

人それ〴〵書を讀んでゐる良夜かな　同

大川に煤竹ながれ年は逝く　同

冬の蠅湯氣にまぎれてとびにけり　同

竹たてゝ簽を沈めたり冬日影　同

實朝の歌ちらと見ゆ日記買ふ　同

水竹居士令閨の訃を聞きて、卓上の石楠花折柄さし入る夕日に美しければ。

石楠の花に西方の光かな　同

等を擧げることが出來る。

終りに、此の三つの句集は輓近に於ていさゝか私の心を打つたものである。であるからこそ側面觀ながらもペンを執つた。兎に角、「新樹」の清麗嶄新。「もゝちどり」の溫潤雅致。「雜草園」の質實高華。ともに俳壇の好き收獲でなければならぬ。（昭、九、七、一）

格調の還元

——折柴氏の作品と碧童氏の作品——

故人澄江堂斯の文藝にはなやかなりしころほひ、文壇一般に亘つて俳句的氣流が旺溢するかのありさまだつた事は事實である。點々とあるものを拾つてみても、室生犀星氏によつて「椎ノ木」が產まれ、「元祿の大作家」が草され——この、元祿の大作家的情熱の如きは、直後、虛子翁の芭蕉に對する輕視的批評に出喰はすと、たちまち「文藝春秋」に於ける「虛子僭上汰沙」の辛手とさへなつたものである。まことに威壓的な力作でもあつた。久保田萬太郎氏は、往年の暮雨から再生して傘雨の名に於いてしきりに「道芝」を構成するところの細胞を產みはじめるし、長田幹彥氏のごときに至るまで聖母の綠衣的俳句を產み出すのすさまじい狀態におかれたのである。さういふ風に文壇的に俳句が根强く滲潤していつてゐる事は、今日と雖も尙ゆるぎないことではあるけれども、外面的に、とび〳〵窺はれるところの小現象にみると、これは又面白い風情でないこともない。すな

はち「元祿の大作家」の作者は、氏謂ふところ「詩よ汝にお別れする」し、「道芝」「もゝちどり」の作者は、こんどの「わかれじも」の跋で、いよ〳〵きつく「わたくしは、もゝちどりの跋に、どこまでもわたしは小説家であり、戯曲家であり、新劇運動從業者である。そしてわたくしの俳句は、わたしといふ小説家の、戯曲家の新劇運動從業者の餘技でしかないと書いた、而していまになつてもわたくしのこの姿態にはすこしのかはりもない。どこまでもわたくしは俳句に對して第三者である」とするのである。第三者と果して感ずるならそれも或はいゝであらう。こゝの問題に就いては、別個に多少の愚見をもつものであるが、今こゝで饒舌らうとは思はないが、とにかく一部に斯うした傾きが見渡せることも事實である。然うした中にあつて、突如として「俳句研究」七月號に、瀧井孝作氏の「藪鶯」があらはれて來てゐるのに出逢ふたのは甚が珍らしいのである。前書きが少々冗長に失するの感なくんば非ずであるが、こゝに述べようと思ふ感想の骨子は、實はこれからはじまるのである。

少々面倒ではあるが、「藪鶯」の全作をこゝに掲げてみることにする。

坐右

懸崖の菊に仕事の机向　瀧井孝作

新刊の書　一句

「柿本人麿」讀みつ松の内　同

羽子板や脊たけのびつゝるまな娘　同

梯子して七八つあり屋根の羽子　同

さがみヶ原、原宿と云ふ所

原中や一とかたまりの宿の梅　同

奥多摩、吉野村

梅林のむら北向きに山の形　同

小佛街道

峠口うめさきつゞく道曲る　同

古里偶感

初午や狐のわたる雪の積　同

奈良住居の頃

厠から寒肥汲んで古石榴　同

光陰矢の如し、日々のけしき愛惜に堪へず

日の光初老の坂に春迅し　同

八王子在

軒高く藁屋明るし雛かざる　同

五日市在、養澤川　一句

山女釣る谷の湍ちのさくら哉　同

山吹はさ庭の地の高み哉　同

うぐひすを飼へば近隣しづかなる　同

脊のびして羽ふるはしてうぐひすの　同

小説家瀧井孝作氏の名は、現下文壇に關心を持するほどのもの丶恐らく知らぬ者はなからうこと丶推測されるところだが、俳人折柴氏の名に於いては、當時の新傾向以外、ことに少壯の俳人間に餘り多く知られてゐないことかとも思はれる。知られてゐてもゐなくとも、「海紅」の名だ丶る俳人瀧井折柴氏は、まさに小説家瀧井孝作氏の前身である。しかも、恐らく十年ばかりの先頃まで新傾向俳句の第一線に譽れを荷ふてゐた作家であるのである、尤も、瀧井氏は、今年の「俳句研究」新

年號に、俳句に湛能な創作家數氏と一緒にその俳句作品を發表してもゐるので、たとへ折柴氏をしらぬまでも、瀧井孝作の名に於ける俳句作家たることをば承知すべき筈ではある。たゞ、しかし其處には「小閑」と題して、

晩春、相模の早戸川へ山女魚釣りに行く

花ぐもり雀原下だる谷の釣　瀧井孝作

と、ほんの一句をとゞめてゐるに過ぎないので、斯く云ふ筆者にしたところで、その作品に於ける、格調の整つてきてゐるのに鳥渡、しかしながら可成り鋭く、これは！　と或る程度の衝撃を喰らつたに過ぎなかつたことが、事實で、直接夫れに觸れて、いま持つやうな心事を開陳すべき筈もなかつたのである。

俳人折柴氏は、まがうかたなく新傾向派の總帥碧梧桐麾下の屈指の作家である。「海紅」創刊このかた、一碧樓氏と共にその編輯に當つたりして、異常な作家的天分(?)は同派の間に嘖々たる名聲をはせたものである。いま、其の頃の「海紅」の中から同氏の作品を隨意とりあげてみよう。

陽炎に幌車洞ろなる離るゝ　（海紅第二卷第一號）

鶯鳴く赤い鬼取置いて　（同　）

甘藍畑に手つく草摘めり　（第二卷第二號）
頂きよりの日ざし田返したり　（同　）
山吹の花爺はいつまでも年寄る　（第二卷第三號）
東風の吹く新ら銅さげもて涙出づ　（同　）
藤の花人の集りつゝあるに咲けり　（第二卷第四號）
斑雞飼ひ日暮るゝ四月の末　（同　）
赤い虞美人草に風吹くのど病む　（第二卷第五號）
鐵砲百合咲きペン握り疲れたり　（同　）
天邊濡れて脚立たつたる　（第二卷第六號）
鯖とれて舟据えたる水をあるく　（同　）
赤き海の足つく泳ぎ　（第二卷第七號）
心かなしくダリヤに突き當りし　（同　）
手水鉢に掃き當るものゝ冷ゆる　（第二卷第八號）
A君一日きてをりし朝顏の蕾み　（同　）
晝から晴たるかたき爪哇薯を剝きけり　（第二卷第九號）
お會式近く壁にもたせかけたるものよ　（同　）
土間に鱈など並べて人となりたり　（第二卷第十一號）
串がきふく紛の夫婦夕まぐれ　（同　）
けふもあるけば日が照る不忍の鴨が鳴く　（第二卷第十二號）
霰降り母の針指にみんな針さゝりたり　（同　）

かぎりがない。このくらゐにしておかう。斯ういふむきに打ち並べて、此の作品の全部を、其の後十年の作品たる、前掲瀧井氏の「藪鶯」に、對照せしめるといふことは、何を僕がこゝで言はうとするのであるか、最早、讀者の常識は、ほとんどもれなく判斷するに苦しむ何物もなからうと考へる。その判斷が下され得るごとく正しく筆者は、詩的天分にめぐまれたる瀧井孝作氏が、こゝに掲げた「海紅」第二卷中にのこされた多くの作品的境地から脫却して、十年の歲月がもたらしたる格調のとゝのへる渾然たる俳句文藝の正しき堂上にのぼりきつた事を述べたいのである。それがよし一個人の場合　あるにもせよ、世上新興的氣鋭の心事を持するの士にあつては、現ゝに、如上二者の境地を顚倒して考慮のうちに入れてあるむきがざらに存在するから。で、あるけれども、これ

だけの材料を、讀者の前へ提供するだけで、冗長談義は、より以上効果的ではないことを知る筆者としては、餘りに多くを言ふことを好まぬ、たゞ、蛇足としりながらも、前掲何れも皆然りだが、

心かなしくダリヤに突き當りし
A君一日きてをりし朝顏の蕾み
けふもあるけば日が照る不忍の鴨が鳴く

のやうなものになると、ことに、現下の俳壇にも、新鋭をほこる作家のうちに、多分に此の境地を踏まへて陶醉のかたちにある人々が存在することを、俳句文藝の尊嚴をまもる感情に於いて言ひたいのである。みづから新鋭者とする側に於いて、或は、これに多少の紛飾を加へて、小器用な細工をするものをたま〳〵見受ける——たとへば、熟字に思ひ設けないルビを附するとか、一句を三行に横へ並べて書くとか。末葉に拘つて、こゝに陶醉をつゞけてゐるのであるが、皆「心かなしく」「A君一日」等と五十歩、百歩、多分のひらきは見られないものでしかあり得ない。虛子翁、さきごろ、かゝる俳壇事情を皮肉つて曰ふことに「このごろの俳壇の情況をながめてゐると甞て何度も吾等の經驗してきたことのやうな氣がする」と。まことに翁の如く長年月にわたつて俳壇的存在をつゞけてから、

大なる鍋の底に河豚を煮つゝあり　虛子（明治廿九年）
內裏雛人形天皇のはじめとかや　同（同　）
寺に幽せられて庭の芙蓉に悲しむ　同（同　）

あたり（當時の新らしい俳句「子規の曰ふ」）からはじまつて、

時ものを解決するや春を待つ　虛子（大正三年）
眼前に常に岐路ある人寒し　同（同　）
蟬とらるゝ聲其他の蟬はたゞ鳴けり　同（大正四年）
鶯が鳴いて居りぬ木爪が咲いてをりぬ　同（同　）

といふやうなあんばいに、幾筋道を通り越して來た人の眼からすると、まことに然うも言へやうことゝその心事を測するに足るものがある。

兎に角、瀧井氏が發表した「藪鶯」は、新傾向に大きく鐵槌を喰はせたと同時に、こうした逆を行つてゐる現下の俳壇に對して面白くも一石を投じてゐるかたちである。其れが現〻に小說界に華々しく活躍をつゞけつゝある作家の立場であるだけ、深く興味を牽くものである。と、ともに又、現下俳壇の深甚の考慮を拂はすべく多きに任ずるものである。

嚴乎たる格調をたもつて、ゆるぎなき俳句の傳統精神におらばうとする、作力乃至その態度をば、充分に看とる上に於いて、過去十年の歳月が、「海紅」第二卷からあげた諸作をもつて、その單なる道程と見做すことを示すものは、とつて以つて、現俳壇の諸相に照らして、考慮せしむるに充分であることを反覆し得るものである。たゞ然しながら、此の意味は、直ちに「藪鶯」の作品を全部的に、佳きに決定しやうとすることではない。たゞ、季題であり、五七五調の基格をふんで、句道に精道するその心理的な風雅道（同時に難行道）に、のつとる點にかゝつて、言はゞ（失禮な言分だが）その自覺をば肯定はするものゝ、いまだ、作句全部を賞讃しやうとする意味ではないのである すなはち、「藪鶯」のうち、最も冷やかに言へば、「柿本人麿」「原中や」「梅林の」等三句の如きに、若干の同情がもてることであつて、他の「峠口」以下十餘句に至つては、正直のところ、決して餘りに多分な同情はもてないのである。更らに云へば、こうした還元性に宿かる陳腐な匂ひさへも感ぜらるゝと云ふのがほんとである。たゞ、

厠から寒肥汲んで　古石榴

の如きに、唯單に陳套の一語でかたづけきれない或るものゝ存在を仄めかしてゐることは見とれる。或るものと云ふのは、云つてみれば、創作家室生犀星氏の創作に於ける場合で、「暮笛庵の賣立」のやうな制作の存在を意味するところがある。作家的意圖は然うした取材に枯淡な味を示さうとする、潑溂たる近代的な藝術心をもつてして蒼古に息吹かうとする心構へである。しかしながら此の點は、創作に於いて名篇暮笛庵の賣立（筆者は犀星氏の一期を劃する名作の一つと見てゐるのである）の同じ作者をもつてしても、其の動向こそ認められはすれ、所詮俳句的傑作として必ずしも、同氏をして產ましむべく容易なものでなからうことを强辯し得るものである。そこに、あくまでも、小說は小說として存在し、俳句は又一つの寶玉（？）のやうな詩として嚴存する所以であると信ずるのである。說を做して云ふ者あり、小說的な俳句ありと、豈夫れ小說的俳句存せんやである。小說は飽くまでも小說にして、俳句は飽くまでも絕對に俳句でほかあり得ないのである。餘談は措くとして、その制作的意圖は、はかなくも、根本から崩れてゐて、遂ひに、創作としての暮笛庵の賣立的藝術價値に到達することなく、纔かに若干の構圖を仄めかして、陳套と討死する運命に了るのみである。おしなべて、瀧井氏の「藪鶯」が、その再生の意嚮を壯とするけれども、然うした今の運命をまぬがれないとする遺憾さにあるものである。

實に芭蕉的苦行は爰にあつたやうである。

あながち序でといふわけではないが、やはり機を一つにするものがあるので、この小論稿に加へ

らるべき性質のものとして、恰度同時代に、新らしいとする俳句のこゝろみにあつた小澤碧童氏の作品に觸れて鳥渡云つておきたい。俳人碧童氏については前章「新人への茶饗」の説述の中で、簡單ながら、冷嚴な感想をおくつておいた（これと併せ讀んで貰へば宜い）。それにも云ふたやうに氏をみとめて世間が名作家であるとするとせないとにかゝはらず、私は名作家の一人として認むるものである。

青桐の葉裏夕日や初嵐　碧童

四五日の遊び日燒けも殘暑かな　同

栃木縣益子の陶師見目家にて

蜂の巣に四五枚からむ木の葉かな　同

結城に參る途中

道々にあからむ莖や蕎麥畑　同

端山にも雲湧き立ちぬ秋時雨　同

草庵卽興

きのふけふ障子張り替へ萩すゝき　同

あり佗びて今年の萩の花多き　同

――「俳句研究」――

の如き諸作の示すところは、それが直ちに、現下新鋭の少壯俳句人が持つやうな、或は新鮮な或は尖鋭な或は甘美なものこそ含んではをらないけれども、天分豐かなる俳人としての團々たる氣魄はうかゞへるのである。さらに云へば、これ等に看る一種の澁さへはなまじ學校の門をくゞつたりしたところで、又東西の諸文藝を嚙りちらかしたところで、鳥渡には到達しがたいところである。とは云ふものゝ、矢張りこの作家にも兎角すると名人氣質なるものが顏をのぞかせがちであつて、作家その人の思惑は奈何もあれ、その煩ひを煩はしとせないわけにはゆかないが、まづ認めてやゝ可なりとすることに異存はない。

ところが、この作家が踏んで來た過程は、今云ふたやうに、期せずして恰度瀧井氏等と共に新傾向の偏陋も、極端な域にまで鋒をすゝめてゐるのである。

梅白う咲きかゝる八ッ手葉晴色に　（海紅第二卷第一號）

橋の下行く汐干心を聲揚げたり　（同　）

冴え返り吹きうけし風のざらざらす　（同　）

燕來る戸を締めてそろそろと出し　（第二卷第三號）
雪解けゆく子のよろこべる道に逢へり　（同　）
枝張りの影落とす雪汁になりぬ　（同　）
明けてゆき花曇りなる　（第二卷第四號）
蛙鳴き初め日あたりに垢づきし手かな　（同　）
宵暖う煙りをるまどね　（同　）

等々。

かゝる道程を經た點に於いて、瀧井氏と擇ぶところはない。いづれをとつて檢するまでもなく、うぶな感情、生ま〳〵しい感覺をさながらに甚だしい格調の亂れに盛つて陶醉してゐるところに全く客觀性を失し、醇化力を微々たるものにしてしまつてゐるのである。しかし碧童氏は「海紅」第三卷ごろ――大正五年頃から、さうした新興一派から離れたかして、同一軌道にのつた作品が見あたらないやうである。さうして十有餘年の歳月を經たのちに、地味な素直な風貌を持しつゝあらはれて來たところの作品は實に上記「青桐」以下の作品であつたのである。

結局するに、瀧井氏の場合と同じことが云へるのであるが、斯の嚴乎たる格調に復したことに於いて、あたらまごころを賭ける俳句探究者の、みち足りたるものと云ふことが出來ると同時に、又この個人的な伸展は一般的に俳句性の方向を啓示して餘りあるものと云へるのである。たゞひそかに思ふに、斯境、反動的現象として幾分でも邪念の混ずるものありとするとき、若しくは多少の動搖の裡にかもされるものとするとき、俳句文藝至上のうてなは、其處に冷徹なるそくばくの距離をおくにちがひない。嚴乎たる格調をたもちながら、盛るに清新潑溂たるものを以てする處に、近代的な眞に不朽な殿堂が築かれねばならない筈である。そこにこそ、殿堂への高峯の道が、荊棘の難路として横はつた筈であつた。これなくんば、まことに高峯は高峯たらず一砂丘として、イージー、ゴーイングの風禍にもたちまちかきならされ終るであらう。（昭和一〇、七、五）

選句二十年間

一

歳月のながるゝほどはやいものはない。と云ふと、このことばは古今無數の人間によつて嘆ぜられたことばなので、決して清新潑溂たる感じを與へはしないであらう。けれども其れは怎うしやうもない眞理で、人類永遠になげかひを深くしながら、同じ日月の運行をながめ、紺碧の天空を仰いでは時空の無限にこゝろを顫はすのである。しりぞいて、履邊の雜草に眼をおとすと、かぼそい雜草の莖は、やうやく一年を週つた月日にしろ〳〵とした花をつづつてゐる。無限なる時空の前に吾人はこゝにふかい感懷をやどすのである。

私の主宰するところの「雲母」第一卷における雜詠で、活躍した人々を擧げるならば、月二郎、瀧北、巨人の三君と、それにつゞいて、土音、たけし、俳小星、左右亭、麥南、大秋、喝鞭（今ノ杜藻）、芙峯、春濤、等の諸君を逸するわけにはゆかぬ。就中、月二郎君は、當時早く、少壯な氣慨に一種の風格をそなへてゐて、數多な投句者の中に斷然ぬきんでゝゐるところがあつたことを同想することが出來る。

水邊にこぼるゝ花や夏木立　月二郎
あなどりのやまひに寐たり麻布團　同
水落して峽中の秋動くかな　同
花を援けて風雨にぬれし單衣かな　同
栗の蟲髣髴として佛かな　同

等のごとき、やゝその全貌をうかゞうに足るものである。おそらく當時九州全俳句界からいつても、既に先進側でこそあれ決して後輩側ではなかつたであらう。最も交誼の深かつた故巨人及麥南の兩君とゝもにこれより曩に「火の國」といふパンフレットを刊行して、私にその選を依頼してきてゐたりしたが、それ等の、熊本縣を中心として多く仲間を率ゐてゐた點に照らしても、ほゞその消息

を窺うことは出來たし、ホトヽギスの雜詠その他にあらはれてゐた作句の事實は、よりよく之れを裏書きするものであつたやうに憶ふ。

瀧北君と故巨人君の句は、ともに穩健で、手法も比較的平明なものであつたが、其處に衆を抽んづるものが認められた。

妹の心知りつつ麥打ちつれにけり　瀧北

竹茧もる水爽かや草の上　同

澄む空にうら枯れの風ありにけり　巨人

うつばりにひゞきて更くる碪かな　同

の如き、いづれも一般を窺うにたるものがある。たゞ、おなじ穩健さにあり平明な敍法に出づるとは云ふものゝ、矢張り動かすべからざる個性の嚴存は、たま〳〵特殊な場合に於て

大國の秋風に逢へる扇かな　巨人

尼僧梵妻にすはる

秋の風はなはだ似たる頭かな　瀧北

のごとき二つの相異る詩境をかたちづくることを見逃すわけにはゆかなかつた。詩歌を產むほどの、詩人的心境に於て、常識的といふことばも感情を全く埒外においての論にはならぬけれども、それにしてもこの二人は多分に常識的なゆき途をとつてゐた。其の點が大概の作句的形態に於て一脈相通ふものを見せたところであつたが、上掲「秋風」二作が示すところの主觀にいたるとなると、こゝには怎うしやうもない兩者の心臟をひらいて、まざ〳〵と半生の展開を示すものが存するかの如く思はれる。故巨人君に就て恁ういふことは書いてよいか怎うかといふことを多少考慮せしめられたところだつたが、既に知れてゐることでもあるし、それに此の事實が事實として故人の藝術的檢討に對する楔緊として、藝術的良心に發するものによる限り、敢て云ふならば先般長逝した巨人君は或る事情のもとに自刄してをるのである。又、瀧北君は當時の小學校長から村長となり、更らに昨年の選擧では縣會議員に當選してゐる。この兩者に於ける人生のひらきはおそろしくも秋風の二句のひらきかたがよくこれを示してゐるのである。

麥南君は、天才的な閃めきを帶びた、主觀の强烈なものを臟したところの有爲なる少壯者であつた。

走馬燈ながるゝごとく人老ゆる　麥南

明眸戀をひそめて深し露の秋　同

の如きはその例とし得て能く君を物語つてゐるものだが、又、たま〳〵

障子うつ蠅に日うとし秋刀魚燒く　麥南

ばせを風ふいて塵うく手水鉢　同

のやうな、完全には人事味を脱しきれぬまでも、而も君として比較的輕快な氣持を展ずる抵の自然的諷詠を見せぬこともなかつた。後年、君の動向が芭蕉や曙覽や良寛へうつゝて行つてゐることは爭はれぬ事實だが、それは頁を追ふて述ぶるとして、君が成田の草庵に閑居後再び句道精進に志した折發表された制作について、之れに出逢ふた場合若干の言を費やしたいとおもふ。

その外、擧げ得べき前掲の各作者の、

朝霧のあめふるごとし芭蕉の葉　土音

春水やみほにあたりて力あり　たけし

水うつてつぐ燈籠の油かな　俳小星

さと人の馴れてねむるや秋出水　左右亭

掛茶風往き來の人も見えず吹く　大秋

留守人の鏡なまめくや萩の花　喝鞭

機に倦めば芭蕉葉にとぶとんぼ哉　芙峯

鵙なくや峻峯九月雪を見る　春濤

のごとき諸作を見出すことが出來る。この中、大秋は既に故人の數に入り、左右亭君も或は俳壇から遠ざかつてゐるか杳としてその消息をしるよしもない。その他の諸君は、熾烈なると然らざるとの多少の差こそあれ何れも俳壇に濶歩をつゞけてゐることに間違ひはない。こゝには一見眼にとまつたものをとりあげてみたので必ずしも各作者をよく代表しうる作として觀ることは出來ないとしたところで、夫れ〴〵の制作たることにまちがひない以上、その面影をば或る程度宿してゐることゝ思ふ。

この中土音君の如きは、こゝにあげた一句にもやゝ窺はれるところだが、はげしく土の匂ひを放射する作句を連發してぐん〳〵と俳壇へのびていつたものである。今の、たけし君の作句に就いての批判は姑く措き、當時の作風は、こゝにも見られる通り、穩健な風格を持してしづかに歩みをつゞけてゐた。人事句に或る程度味をもつたものを見せ、自然觀照に於てもこの時分は、いくぶん主觀的な傾向を示してゐたのである。この點當時俳壇にみなぎり亘つてゐた主觀的作句の潮流にも多分の影響をうけたことであつたらうとも思はれる。左右亭君の當時の作句に横はるものは、どこか

蠱惑的(?)な、おなじ自然の風物に對する感じかたとしてもねばるやうな感覺にうつたへたものでそこに他といさゝか質を異にする個性的な新鮮味を發する或る物を認めさせられる處であつた。この作者に私は當時或る程度期待するところがあつたことを回想出來る。俳小星君と春濤君とのゆき途は、よほど相通ずるところがあつた。線の細さ、やゝ稀薄にすぎる感じはあつたけれども唯美派的な而もおのづから地方色を泌ませてゆく境地が、多少性格的に共通なものを具備したところではなからうかと思はれた。

その外、新鮮な感覺を以て對する側の作者として冷石君と無聲洞君とがあつた。ともに少壯者で、極めて自由に又奔放に詠みつゞけてゐた。

葡萄とる斷崖の陽の赤さかな　無聲洞

踊り子の眼に惚れてみるはれがまし　冷石

虻九坊、鴻子、梅童、儺川の諸君は今日に至る一と筋の道をつゞけて來てゐる第一卷の作者として逸することは出來ない人々である。そくばくの言を後に讓る。

燈籠のいろうごかして大雨かな　虻九坊

糸瓜忌の我も啖病む愚衲かな　鴻子

笑ひこぼるゝ盲二人や秋の風　梅童

精進の日つきて冬のはじめ哉　儺川

第二卷に入つて活躍した作者をあげると、やはり、土音、瀧北、俳小星、麥南、冷石、喝鞭、芙峯、たけし、の諸君である。わけても土音君は、この第二卷に於て、最も君の特色を發揮して縱横な活躍ぶりをしめした。

耕しに出て炭黑しいつまでも　土音

種子まくやまづ神の座に一と拋り　同

股も張りさけよとばかり打田かな　同

等。その他こゝに多くを列擧するまでもなく、大地にぴつたりと足をつけた農人土音の作風はやうやく俳壇全般へわたつても頗る注意をひかれる一人物としてめざましく擡頭しかゝつた。由來、信濃の俳人は獨り土音君ばかりといふわけではなく、いづれも妙に土の匂ひを放射する作品を產む。そのことは、これまでも私は事にふれてしば〳〵筆にしたことでもある。後に必ず出てくる雲母の作家として惜しくも長逝してしまつた臺水君の如き、又吾人と何等恩怨のない側の人で、九萬字氏(恐らく石楠に屬する人と思ふ)がの如きにしても、その作品について檢討を深めて觀ると信濃び

と特有な然うした地方色のなか〳〵に稀薄ならざるものがながれてゐることを見逃すわけにはゆかなかつた。土音君にも亦其の地方色が濃厚に泌こんでゐることに於て俳壇的進出をめざましくした

と言ふに憚らない。雲母の雑詠に於て活躍すると同時に、ホトトギスの雑詠に於てもたま〳〵卷頭に作句を飾る榮譽を荷つてゐた。こゝに掲げた「耕し」の作の如きも雲母第二卷第七號（七月號）の卷頭句であつたと同時に、ホトトギスの、やはり七月號に於ける卷頭句であつたと記憶する。

俳小星君の活躍も亦この第二卷にあつて素晴らしいものがあつた。ことに第七號及第十號に於ける作句の如きは斷然他を壓して將來における俳壇的大飛躍を期待され得るかの感があつたことを回想出來る。

芙峯君と喝鞭君との成績はいづれも相くだらず、常に相並んで進轉した。芙峯君の、特異なる主觀に終始するに比して喝鞭君の作句には然かく强烈なものを疊んでゐることはなく、いつ如何なる場合でも脫線しない常識下におかれて歩一歩と坦々たる句の正道を踏んでゝみゆく狀が瞭かに透かされた。さうして又、制作の飽くまで品のよさは終始一貫して流れてゐるところのものであつた。此處には、一見情熱の稀薄さが感ぜられるけれども、その伐り盡きんとして決して盡きがたい縷々てんめんたるものが横はつてゐることを見逃がすわけにはゆかなかつた。今日の作家杜藻君の存す

る所以は其處にあつた。

山の子の斧もてあそぶ端午かな　喝鞭

大雪にきゝ入る夜の鼓かな　同

山河皆陶器に似たる歸省哉　芙峯

梅雨はれて孔雀火の如く鳴く日哉　同

尙第二卷に於て擧げ得べき作者として、徂春、たけし、濱人、瓦全、としを、等の諸君を見る。當時すでに、徂春、瓦全、等の諸君の作句は相當老練な域に達してゐて、一方に土音、俳小星、左右亭、等の諸君が、たけし、濱人、としを、等の諸君とゝもに多分の熱をもつて躍進しようとする中に交つてから、元氣に滿ちた句作ぶりを示してゐたことを回想することが出來る。

睡蓮の花ねむらせて螢の火　徂春

蜘蛛追へば逃げて芭蕉の天邊に　たけし

梨子もぐや伽籃をこむる朝靄に　濱人

凩や逢ふてわかるゝ獵夫父子　瓦全

灯のつきて雷過ぎ去んぬ春の町　としを

の如き作句がその當時を物語つてをる。

平壤苒峯會の諸君、清流壁、弓山、白天、故雪屋、等の諸君の作句が見えそめたのも此の頃であれば、楚江、幽夢、等の少壯作者の名もこゝに顔をはじめてのぞかせてゐる。その他故湖雪女姉妹月王、南國城、岫雲、晨生、峻溪、鹿鳴、故魚將、等の諸君及マラツカの三法子、白洋雨君等の名を見ることが出來る。今から見ると世間一般に於て、いづれもの俳句雜誌そのものが片々たる感をまぬがれなかつたやうに、矢張り雲母としても、甚だまづしい感じでほかなかつたにも拘らず、これに盛られた雜詠內容に於ては、第一卷を經て、こゝに漸く多少の見るべきものに面目をあらため來つてゐたことが爭はれぬ事實であつた。

二

やゝ整つて來た雜詠欄は第三卷に入つていよ〳〵活氣を呈した。その一ヶ年十二號を通じての卷頭作者をあげてみると、土音、瀧北、呂杣、月二郎、大秋、岫雲、菲風、菲風、呂杣、晨生と、號を追つてその人々の名をつらねることが出來る。その中七月號は私の多忙のために全部の選をすることが出來ず、一部の稿だけを選した結果が發表されてあるのを見る。

蝮取樹海にしづむ日を見たり　岫雲
財つんでその死にざまや秋の風　呂杣
妻もきて蛇ころしたり夕葵　月二郎
夏ちかき雲とわたるや深山鳥　土音
町並や日にふやけさく八重ざくら　喝鞭
あぢさゐに機婦熱愛す金魚かな　冷石
壺燒の一聯の火や花ふかし　菲風
水無月や怒濤に星の火のごとき　虻九坊
睡蓮にわたる蜘蛛あり日照りあめ　三法子
白桃や童耳おそるゝまつりごと　古索
雲よせて親しみあへるさくらかな　弓山
竹の秋人溷濁の地に睡し　清流壁
春塘に戀ひよる波やつく〳〵し　白天
ねしごとく人死してある卯月かな　春水

新參のひとにいぢけて暮春かな　芙峰

等、その外數氏及故人二三を見出すことであるけれども、要するに斯くの如く掲出されてあつたことは遇然とは云ひながら恁うした諸君は、まづ熱心に投句をつゞけると共にその作句の成績からいつても相當の成果をおさめ得たものと見て間違ひない處であつた。就中、出雲の呂杣君のごときは此の第三卷にあつては最も活躍したあとを瞭らかにとゞめてをる。第七號に一句掲げられた「秋風」の句こそ甚だ主觀味の濃厚なもので、何か前書きすべき事柄でもあつたかのやうな作句の背後を窮はれるものであるが、だいたいに於いて呂杣君の持ち味は然ういつた方面のものでなしに、極めて穩健な作風であつて、どちらかと云ふと客觀的に平明な手法をとり、多分な滋味を湛ふる側のものに特長が認められたのであつた。

地藏會のひと四五人や月の雨　呂杣

川鼠しばし萍によりにけり　同

霜月や手燭のせある櫨俵　同

の如きその代表的なものである。又、

（出雲）麥まくや神在月の國の民　呂杣

のやうな出雲に生れて其處に育つた作者にして始めて詠みうるといつた地方色をあざやかにする點が、信濃の土音君と相通ずるところ尠なからざるを見逃すわけにゆかなかつた。左右亭、俳小星君等と共に此の作者にも當時私はすくなからず期待するところがあつたことを回想し得る。若しも主觀味を豐かにしたところで、

ゆく年や夢のやうなる蠅一づ　呂杣

の如き作になると、全く呂杣君獨自のものたるを失はぬ。君の進みゆくところ、うるはしき高臺たることを心ひそかに藏したものであつた。

故人として大秋、衣人、魚將、湖雪女、煙柳、蘆汀、果秋、等の諸君も此處に活躍のあとをとゞめ、若しくは活躍せんとするの機を得てゐることであるが、いま回顧して、最も同情に堪へない作者は山本菲風君である。この頃新鋭の氣を帶びて歩み出してきた君は、たちまち群衆に頭を擡げて、その天才的な手腕を縱横に振はんとした。

春雨や學問の灯に敵だち　菲風

蛇のゐる風强き木瓜の膚かな　同

芋の中の鴉をどれり秋の日に　同
雁高し花をさゝげて水邊草　同
雀なくや芭蕉金魚を暗うせり　同
松が枝にみどりになびけ秋鴉　同

のごとき諸作。そのあらましを物語るものである。いづれも顫慄する神經のすさまじさを直ちに感ずることが出來るものだけれども、わけても「蛇のねる」の如き、「芋の中」の如き、「松ケ枝に」の如き、何と近代人の持つ特異な神經の顫慄であるか。尋常一樣の水準をもつてして窺ひ知るべからざるその琴線の張りと響きを感ずべきである。回顧するに私は此れ等の作を机上にして昵つと作者のたましひを觀詰めたとき、思はず「危い」と心に叫ばざるを得なかつたことを忘れない。その縷のやうに細く耀いた糸は直ちに少壯作家菲風君の心臓からつながつて、たら〳〵と韓紅の血汐をたらしてゐるではないか。私は讀むに堪へがたきを感じ、この作家の幻影を白晝血みどろに浮ばす心の餘儀なきを如何ともすることが出來なかつた。爾後三四年を出でずしてこの天才作家は生ける屍として唯現世にのこされたのである。

三

第四卷に入つて活躍した人々は、やはり、呂杣、菲風、土音、徂春、俳小星、魚將、月二郎、麥南、岫雲、左右亭、芙峰、喝鞭、瀧北等の諸君であつた。それと同時に、これまでぽつ〳〵とすゝみ來つた人もあれば、又、俄然擡頭した人もあるにしても、こゝに活躍の特記すべき側の作者として、豐後の晨生、越後の笛聲、和泉の梅史、筑後の土秋、信濃の秀山、大阪の寒々、等の諸君があつた。これ等の諸君は打ち揃つて今や絢爛たる雜詠群衆の眞只中に鮮かなる存在として認めることが出來た。

水草生ふるこのごろ夜のまどゐ哉　晨生
干柿おろす一と提げづゝの壁の影　同
緣の菊に雨中の月や去來の忌　笛聲
閃めきて木を去る禽や冬の雲　同
百禽の嬉々たる中や秋の幮　梅史
簑虫や朽緣通ふものめきに　同

麥藁を焚けば火青し　樗ちる　土秋

金堂の扉を嚙む鹿や秋ざくら　同

高臺に肌みせて歩るく納涼かな　秀山

背の袋落穗にはらみ影太し　同

蝕甚の月吹きたゆみ年の市　寒々

椿泛べて與謝海つゆの遲日かな　同

等、それ〴〵の、適宜拔萃せらるゝところのものである。晨生君の如きは爰に縱横無盡に詩才を展じたと云ふても可なりで、諸作の何れにも新鋭の氣があふれ漲り、頗る新鮮な香味があつた。梅史君の諸作にはこの頃すでに老練なものが認められ、確乎たる落着きを持してゐるのを見た。寒々君の作はこのごろ既に早く異色をしめして、他の人々の往き途と甚だへだゝりのある處があつた。即ち、寒々君獨自の主觀味であつて、風物のいかなる場合に接觸するにせよ必ず君の特異性の動きは、寒々色をもつて塗りこめられざるはなかつた。上掲二句の如きは能くその消息をつたへてゐやうと思ふ。

此等の諸君と相ならんで、夫れ〴〵の特色を持しつゝ漸く雜詠中に個々の存在を瞭らかにし力量を見せんとして來た作者は商羊、一莖、幽夢、虛空、玄子、片々樓、信一、晩紅等の諸君であつた。

零落す愚直の涙露の秋　商羊

新米や子にいさゝかの髮飾り　一莖

小春の日尊し野人うごき居る　幽夢

月光に峽霧とべるかゝし哉　虛空

梅雨多少棹さし廻す襤褸帆かな　玄子

祭過ぎて海の日に干す鎧かな　片々樓

障子洗ふ前に夥しき白帆かな　信一

大道の羽子に眞晝の牛車　晩紅

等はその作すところである。

三重の片々樓君はおそらく此の後數年の間姿を雜詠に出沒させたと思ふが、作風から云ふと尠からず和泉の山本梅史君のそれに似通ふところのものがあつたことを記憶にとゞめてある。商羊君と信一君は又兩極端の二作者で、前者は老齡、後者は少壯。一つを消極的と見做し得るならば一つは積極的と見做すことの出來る點で個々の特色が光つて見えた。商羊君の上掲の作以外、

身邊りの蠅を叩くや薄曇り　商羊

三日月に足を洗ふや秋ほたる　同

の如き、君が眞乎に農人生活の體驗から得來るところのものであつて、こゝに於て愈克明な境地であり、信一君にあつては、

牛の舌に水鐵のごとし秋の暮　信一

（自畫像）秋風や右に勝れし左の眼　同

とある如きは、如上言ふところの君が獨自な持ち味に於て之亦いよ〳〵あざやかに斯境を展開したものとして肯かしめられるであらう。此の信一君は後年の川端茅舍君であるが、現在作すところをたま〳〵見て、やはり當時君の作をつらぬいてゐた處の主觀味は依然として灼耀たるものであり、幾多の客觀的寫生作に交つて特異なものであることを疑ふべき餘地がないやうである。

意外、千路坊、楚江、鳳嶺、草人星、豫風、岳南、布村、清流壁、弓山、白天、三法子、軒石、三太樓、蛇々郎、洒蝶、南國城、鴻子、牧村、木長、月王、等の諸君は相次いで颯爽たる風丰を持するものだと云はなければならなかつた。

四

第五卷に於てはこれまでと略同樣な人々の活躍するところで、たけし、瀧北、呂杣、虛空、芙峰寒々、梅史、東涯、土音等の諸君が雜詠卷頭の作者としてとゞめられてある。

秋の海日當りながら暮れにけり　たけし

洒さめて寒し冬夜の狂言師　瀧北

氷中に殪ちて美しき小鳥かな　呂杣

竹林を出てくる水や西行忌　虛空

ふるさとのちかづく車窓の霞かな　芙峰

障子内の頰を犯せる花の冷え　寒々

嶋に上れば嶋の茂りに夏帽子　梅史

茂萩やしづかに月の照り曇り　東涯

黑ばえやよせ來る波に鎌を研ぐ　土音

これに次いで著るしく進境をしめして來た作者は、冷石、楚江、竹の春、鹽村、虻九坊、周川等

の諸君であつたが、巻頭の作者として名をとゞめないまでも、菲風、左右亭、巨人、笛聲、軒石、月二郎、幽夢、喝鞭、片々樓等の諸君が依然として力作を見せてゐたことをも亦見逃がすわけにはゆかぬ。第五巻に於て、とりわけ異彩をはなつたのは、虚空、寒々、梅史の三君であつた。

春の夜の一星我れに力あり　虚空

善光寺大本願尼公日ノ出の法會を濟ませて歸還、一句

木花咲く樹々に應へて太鼓鳴る　同

水上夏至乳あらはに黒髪洗ふ婦も　寒々

焚火餘燼いらけぬ心ほがらかに　同

谷橋に雨定めなし花御堂　梅史

菖蒲湯の雨に長居や泊り客　同

の如き作は夫れ〴〵の特色を瞭らかに示してゐた。虚空君の内容的滋味、寒々君の尖鋭な新鮮味、梅史君の練達さ。げにも三人三様の風趣であつた。

その外、大阪の紅夢、熊本の俳木、甲斐の美村、名古屋の青虹、三河の繪一、上海の帆影郎、堺の大春、東京の想京子、晶村、大阪の洛堂、三河の奇石、三重の彩雲、信濃の杉邑等の諸君は比較的新顔の側であつたが、群衆からやゝもすると擡頭しやうとする氣勢を見せてゐた。

五

第六巻の巻頭作者は、瀧北、竹の春、彩雲、蛇山、蛇々郎、白天等の諸君で、これに左右亭、呂杣、月二郎、水裏、草人星、かけい、冬青、古索、芙峰、東涯等の諸君が相比肩して力作を示してゐるのである。前者たる個々の諸作を擧げるならば、

燈明に花冴てるさまやをみなへし　瀧北

玉鉾にうす月いでぬ秋祭　竹の春

負ひ來て薪つむ巖やほとゝぎす　彩雲

宮殿の間に大年の日は落ちぬ　弓山

鷗ながるゝごとし春曉の灯の埠頭　蛇々郎

鯨突く漢海樓に眠りけり　白天

等とする。作は必ずしも巻頭句ではないけれども、各自の最も特色あるものと見做し得るであらう。

この中、竹の春君と蛇々郎君の二人は、當時ぬきんでゝ新鮮な作を寄せつゞけたことに於て相當に

期待するところ饒かつたことを記憶する。

曇り萩に蟷螂見えて羽ひろげぬ　竹の春
汐湧くごと棺前大悲秋のくれ　同
櫂にのりて水夫二人やよく笑ふ　蛇々郎
踊り子の傘あづかりぬさしてみる　同

の如き作句は、當時の俳壇にあつて餘りに多く人の耳をかさなかつたところかもしれなかつたが、選者たる立場に於て、其の鋭敏なる感受性が示す觸れかた、技巧の素直さ、それ等が渾然たる一作々々をかち得る處に、尠くとも私は當來の俳句のたしかさを認め、少壯にして氣鋭なる作者の奮勵を心ひそかに希望するところがあつたのである。

石とれば水がぼ〳〵と落ちにけり　遊行柳
髪あげていとしき顔や天瓜粉　洛堂
汝が朱唇冬ざれて吹く炭火かな　草城
大寒や遊ぶともなく小百姓　帆影郎
弟子一人ねておとなしや謠初め　南崖
そしり言壁に應へし爐邊かな　活刀
桑摘や一途になりて汗みどろ　梅笑
寒菊や直ぐなる枝は蕾未だ　波那女
春の帶ずべりとしめて風呂貰ひ　秀畝

これ等の作家だちは、此の邊に足踏みをはじめてゐる雲母の雜詠における存在であるけれども、個々の作品について靜視することを惜しまなかつたならば、遉がに、各作者の持ち味は早くもそれ〴〵泌み出てゐることの爭はれないのを知るのである。日野草城君如きは曩に「草城句集」を出し、先頃又「句集青芝」を出して、ともに寄贈されてゐるので、一と通り眼を通した。その感じからすると、やはり當時の作のおもかげをまつたく搔き消してをりはしない。

六

漸く雲母は第七卷にはいつた。特に頁數を增すとか編輯に新らしいこゝろみをするといつた風なことは見られなかつた。むしろ編輯の如きは甚だあきたらなく思はるゝ點が多かつたとも云へる。文章の內容的吟味を經てのこれを盛る上の按排等、遙かに山中にゐて爲すが儘にながめて居た自分

の心持ちからすると相當はがゆいものがあつたことを記憶から呼び起すことが出來る。製本の如きに於ても一定の型をとらずちぐはぐに出來上つて來たりする點などから推しても略想像はつくものであるが、しかしながら此の時分の雲母が發行を持ちこたへられてゆくといふ事其れにかゝつて可成りの苦心があつた處に鑑みて、心に滿たない總てを言ひおくる無慈悲とてはなか〳〵に湧き起るべくもなかつた。一つに雜詠の嚴正な批判選拔に沒頭して、作者の佳什を見出すことに之れ努めたことを思ひ出すことが出來る。此の私の氣持は多少なり讀者の間に通じ得たものと今にしておもつてゐる。比較的長く俳壇生活にある側の人々と共に少壯有爲なる側の作者がめき〳〵と頭を擡げて押しせまつて來た事實に照らして然う云ひ得るのであつた。

さて第七卷を通じて活躍した卷頭の作者をまづ號の順に擧げてみると、徂春、衣沙櫻、枯風山、果秋、遊行柳、たけし、岳南、徂春、紅夢、爽雨、魚將等の諸君で、その作句はとみると、

鳩鳴くや低きに澄みて秋の水　徂春
木がらしや櫛なまめける枕もと　衣沙櫻
手術臺にきくや氷柱のおつる音　枯風山
炭舟の中に客坐や燕去ぬ　果秋

秋草に犬尾をたてゝあるきけり　遊行柳
堂廊下落花吹きよるところかな　たけし
裸人に夕堰青く流れけり　岳南
吊葱にかゞまれば見えぬ月の銀　紅夢
流し掃きにわが身まわりや籠まくら　爽雨
みの蟲に風雨すぎたる月夜かな　魚將

等それ〳〵各作者の持味をうかゞふことが出來る。此等の作者以外に、伊勢の透江、靜岡の余石、水戸の眞也、三河の越南樓、平壤の清流壁、駿河の濤衣、諏訪の牧村、札幌の迷人、大連の茨雲洞須磨の竹の春、美濃の秀畝、信濃の周川、臺灣の白雉等の諸君が、おの〳〵力量をかたむけて秀作を示したことは、所詮毎卷一人をのみ置くばかりに過ぎぬところの卷頭をかざることなかつたとしたところで、おさ〳〵これに匹敵する側の人々として、選拔揭出されたところの作品そのものがよく物語るところであつた。

で、私は今顧ておもふに、前揭の作者中、魚將君の天分に深い觀察をかたむけようとしたことを忘れぬ。魚將君の作品の味には淡々たるものがあつた。而も其の淡々たる裡に汲めども盡きせざる

泉のやうなおもむきが流れてゐた清澄かぎりない詩境であつた。さうした詩の純粹さに於て私は魚將君の作風を心に讃へ、遂ひに第七卷第十二號の誌上に發表して、君を選者として推薦したのであつた。然るに、運命の手は、これを誌上へ發表すると同時に魚將君をして幽冥境を異にせしめてしまつたのである。誰かよく思ひ設けんやで、私のこの場合の驚愕と哀惜の情とは今尙忘れることが出來ぬものであつた。通卷二百號、推薦して、句選を依頼することに於て、斷じて苟もせないつもりである選者の、その中で、推薦したばかり遂ひに一回だも選句を見ることが出來なかつたといふことはやるせない遺憾であつた。今尙英靈をおもふて切なるものがあるのである。

七

第八卷に入つての雜詠は、ほゞ第七卷の顏ぶれとことなるところないやうでもあつたが、それでも、ぐん〳〵と投句者の數を增加しつゝあつた點から推すと矢張相當の新顏はあつたに相違なかつた。すくなくとも、これまでさしたる力作を示すところなかつた側の人々で、俄かに頭角をあらはして來たむきも尠からず見られたことではあつた。其の側の人々をこゝに擧げてみると、大阪の櫻坡子、長崎の草人星、甲斐の商羊、岳南、東京の波那女、讃岐の瑠璃洞、東京の桃孫、岩代の世蕭三河の軒石、京都の圖羅、埃及の三村、石狩の手寒等の諸君をいちじるしい側の作者として認めることが出來た。さうして、やはり連戰連勝側の猛者たる作者として第一線に突きすゝんでゐた人々には大阪の爽雨、紅夢、下野の遊行柳、東京のたけし、肥後の月二郎、三河の瀧北等の諸君といへる。わけても大阪の皆吉爽雨君と甲斐の小田切商羊君との作風は、深く私の關心をもつところのものであつたことを記憶にとゞめてある。爽雨君は少壯作家であり、商羊君はすでに壯年を過ぎた老作家である對照も面白かつた。

雲表の色よりうすれ春の虹　爽雨
提灯に襟卷かけて爐邊かな　同
月仰ぐ燈下の顏や冬籠　同
馬小さく二俵おもさよ納め籾　商羊
年の瀨の戸しめて稼ぐ小家かな　同
傘の下にこの身一つの露時雨　同

の如き諸作はこの二作家の一般をしめすに足るものであつた。商羊君の、いつ如何なる場合でも決して俳句道の常軌を逸せない確乎した土臺にたつて淡々として詠みいづる處に、やゝもすると多少

の古色を出し過ぎはすまいかと思はれふしもないではなかつたが、その又一種枯淡な脫俗的な風格が洵に詩趣の溢るゝものを感じさせた。爽雨君にあつては少壯の意氣、新淸潑溂にして觸るゝもの一切詩化せずして歇まざるの慨をもつてゐた。感覺の鋭さ、表現の新鮮さ、たとへば月光の瑠璃を透して薔薇を射る閃乎たる感觸を思はせられるものを常に觀た。わけても深刻、群を拔く作品の一つとして腦底に强くとゞめたのは、

九月二十日父逝く

屍起すや爪ざら〳〵と秋疊　爽雨

といふ一作であつた。秋雜として當時私は敢てこれを誌上に採錄した。さうして私は此の未來ある少壯作家に憑くところの詩魂の極みなき豐かさを痛感したことを忘れぬ。かくて私は年齒の奈何をとふところなく此の作家を選者として推薦したことであつたと記憶する。こゝに漸く鋒芒を表はし來つて、寒々、紅夢等の諸君と共に左遷の名に於て伍す後日の奏鳳君とゝもに大阪の力ある今日の爽雨君は疑ひなく當時すでに光つてゐたのであつた。

徘徊す花火師どもや夕まぐれ　左遷
雲の皺ふかめ流るゝ風の月　世蕉

菊の雨艶やかに葉の霽れて來し　波那女
風に浮いてあそべる蔦や秋九月　清流壁
冬朝の窓の疊りや洗面器　迷人
寒き日やたゝみ嵩みし大布團　活刀
起きいでゝ病褥見やる火桶かな　草人星
風邪聲に醉ひたかぶれる愚納から　軒石
火の番になほ奥よりす歌留多聲　岳南
枯草にあらはれ萠ゆる蓬かな　たけし
雪山に霧かたまつてすぎにけり　土音
大樹下に提げて冬水をどりけり　桃孫
山下りるたまの夜僧や落し水　櫻坡子
足弱く落花に小雨まみれ降る　和香女

等はその出色のものとして擧げうる處のものであつた。其の外、甲斐俳人として如雪、吳龍、鳳嶺、楚江、煙柳等、東京の貫峰、南崖、伊勢の春水子、松山の北浪、東京の綾華、佐世保の紅々、石見

の泥中、伊豫の豫風、岳城等の諸君が鋭鋒を出し始めてをり、京都俳人の凡平、ながし、幼瞳、紅醉宵月等の諸君も若干の作を示してゐるが、要するに雜詠欄の旺盛をものがたる數多の句稿に煩はされて、多少嚴選のかたちにむかつて來てゐることが觀ぜられるのである。九、十の二ケ月は別としても（九、十の二ケ月は私の眼疾の爲め、前田普羅君と長谷瀧北君とにそれ〴〵代選してもらつたりしてゐる）十一月號卷頭拙文に見ても「徹宵句をつくる」といつた意氣が仄見えてゐて、尠くとも、これ以後の選句には、餘程嚴格な態度をもつて向つてゐる緊張さがうがゞはれる。

八

前卷後期に於て上述のやうな多少張り緊つた氣持で雜詠にあたつてゐた自分であつたことは確だが、第九卷に入るといよ〳〵之れはあざやかなものとして看取することが出來るやうである。編輯の方も此のころは瀧北君が主としてこれに當り、軒石君が助力を吝まず懸命にやつてゐたやうであつた。俳壇外の他の方面から、雲母雜詠に盛られたところの作品なり、又とぼ〳〵と發表しつゝあることではあるものゝ、私自らの作句に對する關心又批評なりが、やゝ色濃く見えはじめたのも此の頃であつたやうに思ふ。もちろん、既に第九卷をかさねて來てゐて、當時の心境を割つてみると、雜誌そのものは四五十頁を出でない片々たる感じほか與へないところのものだつたけれども、俳句文藝といふものを荷ふて、社會にぶち出す微力は微力ながらに、克明な途をたどりたい念願に燃えてゐたことは瞭らかなことであつた。その反映として、私それ自身の作句が怎うした風なものであつたか、乃至又雜詠として誌上に掲げ社會に推すところのものが、たとへ範圍は非常なひろがりでないにしたところで如何樣な傾向をとつてゐたかと云ふことは、略想像もつくべき筈でもあつたのである。

疑ひもなく、私は可成り清淨とした氣持で選句にたづさはり、ある程度嚴選を加へて押しすゝむ意嚮にあつた。ことに今、はつきり覺えてゐるのは第九卷第二號に盛つた雜詠の句稿に對する時の氣持である。當時、雜詠の應募句數の規定は二十句であつて、すくなからず澎張して來てゐる投稿の嵩であつたが、その中から百二三十句を選拔して發行所へ送つた。それの第一位に推薦したのが信濃の俳人臺水君であつた。臺水といふ俳人は、勿論それ以前としても、ぽつり〳〵句稿を投じてはゐたものであつたことはあつたが、さほど深く私の氣持に投ずるところはなかつたやうに思ふ。然しながら、私が然うした心境を持して一意清淨とした選句に驀進しやうとする砌に、突きつけて來た句稿の、粒々辛苦のあと、而して又豐かなる天分をかたむけて清澄の句境を展じたものには、

豁然として心ひらかざるを得ない衝動と欣快の情とを禁ずることが出來なかつた。その選句は僅かに五句に過ぎなかつたが、その内、三句をとつてみると、

いざよひの月となるべき風雨かな　臺水
山鴉煙花こだまに鳴きにけり　同
冬ざれや泥藻にかゝる蟹の爪　同

等これである。もちろん、一句として今尚珍重に値せざるはない。他の力作を嚴正批判する立場に於て、卽ち選句する側として、たま〳〵素晴らしい名作に出逢ふことほど光榮を感ずることはない。眞に俳人として生き甲斐を痛感せしめられることである。恰度、臺水君の力作を見出した際、尠くとも私はこの一つの場合として歡喜したことを忘れぬ。しかしながら天は實に無情で、此の天才作家臺水君をして忽ち病死せしめて終つたのである。曩に逝つた魚將君のやうに選者として推薦することもなく、君の英靈は世の凡眼をうらんで地下に永眠することを思ふと、僞りなく遣る瀨ない感じである。故人臺水君については、これではまだ滿足の言葉を費したとは思へない。

猶、此の第九卷に於いて活躍した作家だちを擧げてみると、肥後の巨人、甲斐の幽夢、伊豫の活東、石狩の紅實、長門の麥村、須磨の竹の春、伊勢の石堂、甲斐の岳南、楚江、吳籠、水戸の眞也、大阪の左遷、三河の越南樓等の諸君で、その作句は、

町うらや梧桐噛んで時雨馬　巨人
雲とんで風吹きそめぬ葉水仙　幽夢
夕風のふきかはりたる紛雪かな　活東
いとまつげて尙たちかねし冬夜かな　紅實
寒餅に湯氣うす〳〵とありにけり　麥村

盟友賓鶴逝きて五年一月廿六日彼の忌日

日の下の焚火に涙して笑ふ　竹の春
冬瀧やたら〳〵つたふ岩の襞　岳南
蚊とんぼのあるく花菜の廣葉かな　石堂
薄霧のあそべる雨のぼたん哉　楚江
秋扇をかざせる人に見られけり　吳籠
早や梅雨のはれし田舟やゆき交へり　眞也
蓮飯をわけあふ翁媼かな　左遷

の如くである。ことに此の卷終りに近づく頃から左遷君の躍進群をぬいてめざましいものがあつた。

かたはらに心いと澄む門火かな　左遷
燈籠をともし遲るゝ悲哉　同
天爪紛せめてみめある貧し妻　同

等、透徹した詩境、一脈の寂びをふくんで珠のごとく詠みいづるところ、其處に獨自の閃めきがあつた。吾人をして採るに以て雀躍の情を禁ぜしめざるものがあつたのである。當時、俳壇一般の傾向は斯かる深奥な詩境の味到に、或は反するところなきかを私はひそかに感じてさへ居た。

今や、逸才が並び起つて來た。其の中に又鋭鋒をかまへて東京の貫峯、京都の野風呂、幼瞳、魯水紅醉、紀伊の紅洋、平壤の木長、若松の千葉城、沼津の放也、甲斐の鳳嶮、靜岡の沛麥城等の諸君が打ち交つてゐるのを見た。それと又、呂杣、月二郎、喝鞭、徂春、瀧北、等の諸君が依然中堅作家であつたことに變りはなかつた。

九

漸く第十卷に入つた雜詠は、やゝ整然として足並みをそろへ俳陣を張るの觀を呈し來つた。外觀に於ける問題は爰に要のないことではあるけれども、前章にも述べてある通り、私の氣持ちが、全力を打ち込んでゐたといふ裡にも、更らに嚴密に云ふならば、雜詠そのものゝ選といふことにかゝつてこそ寸分隙ない全力的なものであるに相違ないとしても、全部に亘つて隙のないものだなどとは決して云へなかつた。言ふまでもなく、三河といふ遠隔の地にある雲母であつてみれば、左樣に手の伸ばし得やうもない筈だし、總てに伸ばさうとすることは私自身の心境に於て許されぬものでもあつた。其れにも拘らず、表紙畫の如きに於ても、畫家に依賴してこれまでに見られなかつた立派なものを私の手から送り屆けるやうにした（勿論從來すべて然うしたことで續けられて來てはゐたのだが）。第十卷を通して、此の種のものとしての牛田雞村君の力作が、三回變つてこれを飾つてある。この事實は、只單に表紙畫のみの問題として見過すには餘りに味が有り過ぎる。すなはち多分ではないにもせよ、此の方面にも雜詠に傾注する力の餘波が及ぼして行つてゐたと見るのが至當なのである。獨り表紙畫のみに止らない。內容としての文章の選擇乃至自分の執筆おのづから之れに伴ふものなしと云へなかつた。まさに然ういへるのである。

で、さういつた場合に置かれてある雜詠欄に、今眼を通してみると、先づこれが卷頭の作者は眞也、呂杣、土音、豫風、左遷、左遷、芙峯、眞也、月步、越南樓、土音、波那女等の諸君であつて、

相次ぐ作者に信濃の臺水、靜岡の秋灯、肥後の月二郎、伊豫の活東、埼玉の南海、大阪の大文字、新潟の念腹、豐橋の長船、吳の草亭、平壤の清流壁、木長、若松の千葉城、甲斐の清礎等の諸君があつた。前者の作句はといふと、

秋すでに山茶花ひらく日影かな　眞也
(出雲)神在月の山低く雪降りにけり　呂杣
雨年の笠の寂れや田植濟む　土音
たはれ男のねむれる秋の机かな　豫風
風やめば冬もなげなる日向かな　左遷
(震災)職工とわかるゝや秋日赤く落つ　芙峯
はつ蟬やゆくりなく來し山の寺　月歩
青東風の太藺や雨をはらひつゝ　越南樓
秋山や・木立の中の蕪村の碑　波那女

等何れも夫れ〴〵の獨自性を有しながら餘情に富み、穩健正道を往く佳什として推賞に値するものであつた。そのうちで、呂杣、土音、芙峯等の諸君は姑く措き、眞也、豫風、左遷、月歩、越南樓、波那女の諸君が、それらの諸君を壓するばかり鋭鋒をかまへて猛進し來つた氣勢には寧ろ痛快の感があつたほどである。

旱天や山裏遠ちの朝の雷　臺水
賤が蚊帳うすはかげろふとまりけり　秋灯
山霧のよせし戸ぼそや走馬燈　活東
時雨傘そこ〳〵に買ひかざしけり　南海
苗札や雨土つけてあきらかに　大文字
連峰の中の故山やいかのぼり　念腹
御手洗に新らの柄杓やお霜月　草亭
大寒の氷庫につゞく牛車かな　清流壁
冬河岸や舸子を相手の小商ひ　木長
寒念佛晴天の灯を提げにけり　千葉城
山蜘蛛の縫ひあはせたる尾花かな　清礎

等それ〴〵其の特色あるものを拔き出してみたのであるが、たとへ卷頭の作者として第十卷にと

ゞめられなかつたとしたところで、作句的技量に於て、その相離るゝ幾何たるかを知り得ないものがあつたのである。此れ等の諸君の外、依然秀作を寄せる側に杜藻、爽雨、月二郎、菲風、故煙柳、竹の春、瀧北、等の諸君があつたことは云ふまでもない。さうして、猶、これらの諸君と伍して、東京の武富貫峰、勝部蘇聾、肥後の故宮部寸七翁その頃臺北にゐた濱田坡牛等の諸君が常に老練な手腕を見せてゐた。

初雪や歸りし我に足搔く馬　貫峰
二三畝うちひろげゝり山畠　蘇聾
母の忌む我が合掌の晝寢顏　故寸七翁
干衣の竿を渡すや籾の上　坡牛

一〇

第十一卷は、一月號だけを三河で發行して、第二號（二月號）を甲斐から發行してゐる。變轉期の面白いところにかゝつてゐるのである。いま、此の一卷十二ケ月の各號を通じて眼を通すと、何よりよく事實がこれを物語るわけではあるが、記憶に存する點からいつても、俄然緊張の度を加へてきたことが思ひおこせる。活東、左遷、秋灯、軒石、幽夢、眞也、大文字、松濱、夢拙、楚江、素來、康々、石堂、放也、等の諸君が前半期に於けるめざましい活躍をした側の人々であり。後半期に於てはやはり活東、松濱、枯風山、春水子、牧村、淡路女、楚江、羽公、悠々子、草人星、青雲、秋去衣、芽子、豫風、波那女、故泊春等の諸君が活躍をほしいまゝにしたところであつた。現在に於ては、雲母の雜詠欄から遠ざかつてゐる此れ等作者の當時の作句をこゝろみに採りあげてみると、

露の野や旭に影つくる鳥　おどし　秋灯
ほの〳〵と炭は火になる夜の雪　松濱
窓の風襖にこたへ冬日かな　故夢拙
ひとり身や蚊帳の名殘りのいつしかに　素來
夫婦してしづかに年を守る夜かな　康々
袷着て妻うつくしや病上り　石堂
秋蟬の聲をしぼるや槇の雨　放也
月澄みて神樂もいふ祭かな　枯風山

棹さしてみよし上がりや早苗舟　牧村
傾けてそこひ明りや古茶の壺　羽公
童顔の日燒たのもし庵主　故青雲
ひぐらしや雨夕映えの降りほそり　秋去衣
天風に音のかはりたる雲雀かな　芽子
雪に歸る人の手寒くさはりけり　波那女
鶴ひくや雲間の空の秋に似て　故泊春

等それである。此れ等十有餘名をあげたばかりの中でも、故人の數に入つてゐる作者が、知れる範圍において三名までである。夢拙君の如く、歸朝後は素より渡米以前、古く俳壇生活をつゞけた人、又泊春、青雲二君の如く少壯にして饒多なる天分の所有者でありながら長逝された人等を回想するとき、尠なからぬ哀愁の感を催する半面には、その他の、雲母雛詠欄に天分をかたむけて活躍された人々が、今何處に在らうとも、俳句といふこの文藝に對して全く閑却し去るほどな異端者でない限り、恐らくは更らに倍加した力量によつて逸作を產みつゞけるだらうことを推想して祝福するの念毫末も曇りあるものではない。

前卷に就いて述べた場合、その最後に故人寸七翁君の作一つをあげておいたが、二卷を通じての今故人たる作者の惜しむべき中に、ことに此の作者は氣の毒におもふ一人であつた。寸七翁君は、生前、鄕里熊本の立憲新聞といふ四頁刷の政黨的色彩の濃厚な小新聞の一頁によつて、主として筆を執り、論評を馳せ、選句とゝもに作句の發表をも恣にしてゐたやうに見受けられたが、その論評に於て、私を目するに常に「人生派」をもつてしたやうであつた。寸七翁君の言ふたところの人生派なるものは、私に首肯出來ないことはなかつた。といふのは、多少私の忖度をも交へることに於て、唯單に花鳥草木の美を點じ、禽獸魚介をさしてのみ、その感激による範圍を出ないところの諷詠たる以外、人生の種々相に直面して短的に諷詠するところのものが、抵劣、卑俗ならざる美的要素を包容する限り、前者と相俟つて當然藝術的價値を荷ふべきものであると論究する點にあつたといへるのである。然うした論點にふれて、むしろ私側からすれば、故人寸七翁君の作品の多くは、所謂人生派の名のもとに置かるべきではなかつたかと私は今更らならず觀てゐたのである。ホト、ギスの卷頭に、生涯一度でもいゝから自作を置きたいといふことを生前公言して、同誌上にもどんなか形式で發表されたやうに記憶するが、それが遂ひ一度も實現することなく死んでいつてしまつた。尠くとも近代に於ける最も眞劍な俳人中の一人であつたと見るべき然ういふ精進さに於て、彼

の感情的にめざすところと、而して又、叡智を傾け盡して論ずるところと、極く少しばかりでも、ちぐはぐに喰ひ違つたところのその悲慘さ。この一生を賭してかゝつた詩的生活のむごたらしさは、誰か涙なくして眺むることが出來やう。彼寸七翁君に於て、必ずしも文字通りなものであつたかどうかは輕卒な忖度が許されぬけれども、まさに此の人生的な曝露とその過程は、文藝自體に深甚な考慮が拂はれねばならぬところだし、同時に、此處にこそ此の作者が人生派たるべき分明なものを表示してゐることゝ私は考察する。

いま、故人の數句を採つて、君の天分に觸れやう。

春愁をしりそめて倚る柱かな　故寸七翁
病人や閉めまはされて麥の秋　同
田植妻添乳の笠をぬぎにけり　同
寛ろぎの夫人の足や籐寢椅子　同

此れ等一つ〳〵を味讀するとき、所論を超えた作者の心境が克明に何人の心膽をも打ちひしぐことであらうと思ふ。俳壇に於ける、卷頭なる語を假りに玲瓏玉のごとき佳什を盛る器の謂ひとするならば、故人や又將に冥すべきで、此處にこそ卽ちその器ありであつた。故寸七翁を論じやうとするには餘りに手短かに失するきらひあることを承知するもの〻、而も故寸七翁君の所謂人生派そのものであるべき逸材として。これを惜しむの情、その一端を洩らすところとする。

一

甲斐へ發行所が移された前卷から雜誌の全面へ亙つて緊張の度が加へられたことは前項にも述べた通りである。舊態を脫して所謂面目一新の形容を以てするに足るだけのものがまさに有つた。自然、その中心を做すところの雜詠が旺んなる狀態を示してゐたことはもちろんである。而して、雜詠旺盛な狀態の中にあつて、めき〳〵と頭角をあらはして來たのは美濃の原青雲君であつた。青雲君は、先づ第十二號に入るや、第一卷から第三號に至るまで、たてつゞけに卷頭の作者たる地位を占めて其の豐かなる天分を發揮した。いま、第一號から第三號にわたる同君の作中から若干を採り上げてみると、

元朝の雪や曠着のかぐはしく　青雲
あぢきなく爐を這ふ蜘蛛やうち眺む　同
野を燒くや大火に馴れて夕間暮　同

人好シの老の焚火に寄りにけり　同

病後髭がくりと落ちぬ日南ぼこ　同

の如き、まづその特色ある目ぼしい側の作品といふことが出來やう。「元朝の雪」に此の作者の如何にも天分にめぐまれた詩的感覺の鋭さを觀察することが出來るし、更らに「あぢきなく」に至ると、寧ろ異常なる作者の感受性の働らきが、一種グロテスクな幽かの感じをさへ與へて、味讀する者をしてぞく〳〵心頭に迫り來るの感あらしめるのである。「野を燒く」「人好シの」「病後髭」にしたところで、何れも、かり來つた文字を透しての背後にひそむところのものは、決して尋常普通なる主觀としてのみ看過し得べきものではないのである。後年この作者は、俳號青雲を白鳳とあらためて、靜岡縣の燒津へ移り住んだ。その移住した頃だと記憶するが、同地の俳人、仁阿彌、枯雪等の諸君とうち連れだつて、雲母の秋季俳句會へ列席したことがあつた。そんなことの後間もなく何か一身上の煩悶に耐へ難く自殺してしまつたといふことを訊いた。少壯有爲なるこの作者を惜しむこと甚だ深いものがあるが、而も少壯にして、

あぢきなく爐を這ふ蜘蛛やうち眺む　青雲

の境に呻吟する作者にして、懸命の努力をさらに〳〵俳諧殿堂の奥に据はるところの玉臺をめがけて精進するとき、果して怎ういふものであつたらうかと、うたゞ哀惜の情にたへないものがある。

故青雲君の外に、第十二卷に於て活躍した人々は濱松の羽公、東京の石堂、淡路女、大阪の佳外伊豫の豫風、活東、在千葉の麥南、三河のよしほ、長崎の草人星、出雲の呂杣、伊勢の春水子、福岡の千鶴女、在德島の牧村、等の諸君であるが、左遷、月二郎、杜藻（喝鞭君は今は俳號杜藻と改められてゐた）等の諸君が相變らず、これに匹敵し若しくは凌駕せんとする氣勢を續けてゐたことは勿論である。その外尙、大阪の大文字君と三河の越南樓君が新鋭の作者として、底力を持しつゝ進んで來てゐたことは見逃すことが出來なかつた。ことに大文字君の穩健なる境地、極めて無駄のない手法の中に滋味をひそめてゐる諸作に尠なからぬ關心を向けさせられたことを記憶にとゞめてゐる。

庵の戸や萱野の風の日もすがら　羽公

水洟や鼻秀でたる女の子　石堂

人にやゝおくれて衣更へにけり　淡路女

夕月のあらはにさむし芭蕉枯る　佳外

山風にもまるゝ影や鳥おどし　麥南

上人の刻を定めて晝寢かな　春水子
蟲干やあだに色めく古鏡　千鶴女

等それ〴〵新鋭たる作者の情懷であつた。尙、

龍膽やはぐれさきたる巖のかげ　蘇南
鯊舟や波間の月にもどさるゝ　晩紅里
枯蓮や水の夕月光りいづ　秋去衣
冬つばき一と雨ありてまくれなゐ　楚江
新秋や日あたり澄める瀧の面　柴田完
稻刈るや田子の浦風たえまなく　斗久刀
指頭より翅ひろげたつ螢かな　墨石
對坐して日あたる膝や秋袷　吳籠
小箱なる櫛笄や冬日向　越南樓
嵐峽の夜の秋なる一路かな　活刀
北風や飯ぬくゝ食ふ妻とわれ　岳南

俄か雨十夜の人に降りいでし　野葡萄
濱路やなぐれしぶきて冬の浪　冬嶺星
亂れ萩束ねあげたる素繩かな　紅實
大空の風吹きすますすさまじき風の西日　夜城
子は老ひの淋しさ知らず日向ぼこ　茅子
日や豆の花　慧月

等の作者及作句も見逃がすわけにゆかぬ。これ等の作者が寄せた作品の夫れ〴〵には勿論各個性を展じて特色を示すところが、はつきりしたものであり、何時如何なる場合に於て第一線にたつ作者達をしのぐかも計り難い作力を持しつゝあつたからである。

この十二卷に於て、詳細に亙りがたいまでも特に少しく言及しておきたいのは、大文字、麥南、兩君及び故泊春、千鶴女兩君並びに淡路女君の五作家である。

そゞろ來て夜氣しづみゐる櫻かな　大文字
庵の木にかくれて星のちぎりかな　同
瀧涸れしころを來りし深山かな　同

埋火や母の不平にうけこたふ　同

ほろ醉ひのたしなみ顔や年忘れ　同

こゝろみに此等、大文字君の數句をひろひ上げてみると、君の持ち味がよく解る。すなはち其の性格なり、趣味なり生活環境まで、仄かに浮び出して見える。曾て「近代句關心錄」に於て、君の「夕風や水落つ音の右左」或は「夜おそく歸りてあつき炬燵かな」等の諸作に觸れて或る程度詳しく論評を下してゐるので、本稿としてはこの場合君の作に於てばかりでなく、深く詳細に亙ることをさけるが、とにかく、境地がはつきりしてゐて、わだかまりがない。而も餘情のてんめんたる點に於て獨自のたしかさがある。凡そ、平明、簡素な境を展ずる場合として、多くが陷り易い處は、淺薄輕佻である。それが君の作句にあつては不思議に餘韻餘情に變つて、てんめんたる感じを與へる所以のものは、怎うかといふと個性の純眞さがその因をもつものでなければならない。前句は、餘りにも明瞭な作例と做し得るけれども、後句二つ「埋火や」「ほろ醉ひの」の如き、此の作者の生活環境の描出に於て、或は他の側の作家とすれば決してこれほどまでに手輕く克明に而も滋味をもつて出で難いところであらうと思はれる。其麼にまで——人事句にわたつてまで如上の特質が滲潤してゆくのである。斯かる大文字君の作品の持つ力は當時すでに尠なからず私の心を捉らへたこ

とであつた。

麥南君は、本稿の當初に月二郎、故巨人兩君を引き出して筆したとき姑らく保留した一人であるが、雲母創刊前から常に私に其の作句を寄せてゐた詩的天分の豐かな情熱家で、而も苦吟尋常を越ゆる鹽梅は、見る眼に寧ろいた〳〵しい感じのするほどな作者である。年少既に秀作を示してゐたのが、肥後から、東京へ移り、漱石全集か何かの爲事に從つてゐて、其の後又下總成田の里に閑居し、文字通りな草庵生活を營むに及んで、作品の詩的香味はぐんと張りを持つた。

風邪人に渺々と澄む日空かな　麥南

うつし身をいとほしみはる障子かな　同

秋晝や見でゝ拾ふ庵の塵　同

色に出てほのめく薔薇のつぼみかな　同

月の鶯鶯みじろぐさまの水輪かな　同

等、その時新年號に採錄した作句中のものである。一點無駄のない敍法。「風邪人や」「色に出て」の如く尖鋭な感覺、それが持つて生れた詩才に扱はれて、例へば古今の天才が毫も文字そのものを荷厄介に感ぜないやうに、季語なり十七字音の基格なりが、身に憑いてから、彼の一分野の自稱先

端側の俳人だちが材料と纔かの破調とをもつてして嶄新がるものとは格段の距離をおいてゐる立派させ見せた。だが、此の側の人は兎角通有な、忽ち飄乎として消え去り、その中に又忽然としてあらはるゝといつた氣まぐれなものが心の一角に蟠居してゐることは、此の頭拔けた作者のあたら力量を殺ぎがちだつたと云へば云へないこともない。けれどもそれは嚴密にいふて、此の作者そのものに期待する處饒い此方の慾望が、敢て力量といふ文字を使驅しはするものゝ、本來、力量そのものに所產の斷續が災ひすることはないかもしれぬ。常に斯かる側の作家は飄々乎として詩的生命を驅るところに耀きを見せるといふ言ひ方も出來るのである。

故泊春君は又麥南君とは少しく違つた個性の所有者で、斷續常ない反對に常住坐臥俳句制作のことなくして一日一夜も過ごし難い側の人であつたが、惜しむべきことは極端な病弱に身を縛せられてゐた。同じ健康の餘りすぐれなかつた境ひから身を起して、漸く健康が恢復するとゝもに、やはり豐かなる天分を傾けて秀作を寄せて來た作者に千鶴女君があるが、此の二人は居住する處こそ、伊豫と福岡市外との距りはあるにせよ又男性と女性とのちがひはあつたにしても、詩的境地として餘程相似合ふところがあつて、泊春君の晩年近くは、一つに病氣療養のためではあつたやうだが、福岡の郊外、生の松原の邊に假寓して、お互ひに風交をつゞけ、勵ましあつて句作をつゞけた。

馴れそめてすゞろに秋の朝寢かな　故泊春

卯の花や水みちわたる夕山田　同

人戀ふて人になづまぬ布團かな　千鶴女

（茶席）しみ〴〵と身に松風や彌生盡　同

の如き各僅少の作句をとりあげた上にも然うした仄かなるものを窺ひ得ることである。

淡路女君は、俳壇的に、女流作者側の先輩と云つても差支ない作家である。子規以後の、新興俳句界に於ける女性の中、かな女みどり女、せん女、糸女等々の中に交り、澄女の俳名によつて當時の女流句界に名をほしいまゝにしてゐた。而も作中一脈の寂びをふくんで、淡々たる諷詠のたしかさは、今日に於て女流界第一に位すると認むるに躊躇しないが、當時すでに、その底力ある地味な辿りかたに群をぬいてゐるものがあつた。

掃きとるや落葉にまじる石のおと　淡路女

いねし兒にやがて吊りけり秋の蚊　同

ゆく秋のあはれもしらで唯忙し　同

春さむや買ふてすぐさすふだん櫛　同

人にやゝおくれて衣更へにけり　同

等、作者獨自の滋味を掬することが出來よう。君に於てなか〳〵に深みある主觀のいづれもが、譬へば縷の如くかすかにめん〳〵たる情を曳くところ、ほとんど他の追隨をゆるさぬかの感がある。千鶴女君の句境をかりに春に譬へ得るならば淡路女君の句境は秋に似たる句境である。前者の積極的なるに對して後者は消極的風丰を持するものである。兎に角、この二女性作家が二つの異彩として第十二卷及びこの以後燦たる光芒をひくものは、まさに俳壇的に女流としての大いなる足跡を印するものである。

一三

雜詠が今や絢爛花のごとく奸を競ふて來たことは明瞭である。第十三卷に於て活躍した作者をひろひ上げてみると、第一號の露鳴、千鶴女、龍子。第二號、紅洞、秋去衣、春水子。第三號、念腹吟月城。第四號、乙朗、白嶺、綠泉。第五號、奏鳳、劉生、千鶴女。第六號、吳龍、蘇南、周川。第七號、奏鳳、紅洞、淡路女。第八號、千鶴女、大文字、青雲。第九號、草人星、味三夫、豫風。第十號、秋雨人、赤心女、羽公。第十一號、豫風、色葉、鶯谷樓。第十二號、沙王、藤邨、杉也等

の諸君を、活躍者中の活躍者としてながめることが出來る。これまで、しば〳〵所產を引き出してきた作家だちを措いて、新たに進出した側の作品を採り上げてみると、

山風のながるゝさまや花葎　露鳴
時ならぬ一錢鐘や奈良の秋　龍子

聖上御平癒祈願

一抹の雲の去來やお霜月　紅洞
木枯やなぐれ颶りて夕鴉　秋去衣
風早の舳ぬれたり納涼船　春水子
干海老に冬高凪ぎや清見潟　吟月城
わが旅の人になづまず梅の茶屋　白嶺
一灣や寒明けの日の雪げしき　綠泉
勝山髷に雪のせて來ぬ戀女房　吳龍
小庵や白桃活けて夕あかり　蘇南
春潮や渚におきし乳母車　劉生

たんぽゝの冠毛たゝく杖の先　龍子
春の灯やものなつかしき夜のつゞく　靑雲
蓍音機支那樂かけて蚊遣かな　味三夫
夕燒や犢とばせて靑田守　豫風
惜春やわが身の戀をよそ語り　赤心女
さしむかふ夫婦まびしや冷奴　羽公
歸省子の蚊火に耐へざる風情かな　色葉
蠶埋めしその土ノ上のすいと哉　鶯谷樓
二つ三つ棗をおくや鍋の蓋　沙王
山陰や露冷え〳〵と墓頭ヲ　藤邨
谷水や龍膽咲いて笹の中　杉也

等である。

最早や雜詠欄は、卷頭二三の作者のみをあげて、それで活躍せる作家の名を示したりとするに難い。恐らく雜詠欄全體の作家はいづれも卷頭をめがけ、句稿全部の作を採錄せしめる意氣を持するものであるには違ひないにしても、嚴正批判の結果として採錄し得たる各作中、尠くとも第一、二、三頁等にわたる十數名の各號作者に於ては、技倆を決する上に何れも兄たり難く弟たり難い一句の差はおろか、同句數に於て比肩決して相讓ることない精一杯の力量をあらはしてゐることが分明なものであつた。さうした中から、或は多年の研鑽をかたむけ、或は俄然進出する少壯の天分を示して、如上列擧した各作家が、著るしい手腕を示してゐるには瞠目せざるを得ない感があつたのである。

露鳴、紅洞、味三夫、秋雨人、赤心女、羽公、色葉、鶯谷樓、秋去衣、春水子、念腹、吟月城、乙朗、白嶺、綠泉、吳龍、蘇南、周川、沙王、藤邨、杉也等の諸君は、その中に在つて特に擡頭するところの氣慨を持したものであるが、爰に、猶、本邦畫壇の偉傑たる岸田劉生、川端龍子二家の作句が、忽として轡を並べてあらはれてゐることに多大の興味をひくものがある。云ふまでもなく前者は本邦畫界に於ける第一人者であつたし、後者は日本畫界に於ける第一線に躍進をつゞけつゝある大家中の大家である。句作の上にも遺にこの兩大家の、藝術的天分の光りは滲透してゐた。やはり其の美術的制作が含蓄する持ち味をさながらに親ひ知らしめらるゝものが、短的な閃みきの中に見えた。濃厚に饒多に盛るべからざる作品的性質上、露骨でないまでも、最小詩形たる俳句文藝

として適當なるだけそれだけに存することを見逃がし難いところであつた。

夕虹や出水につかる四ッ手小屋　龍子

山の陽の水車に遲き垂氷かな　同

小男鹿の尾花がくれに二日月　同

醍醐三寶院

金屏の剝落をしむ秋の寺　同

戀猫の口眞似すれば應へけり　故劉生

醉どれの大風船をかつぎゆく　同

春風やゆくともなしに長谷の寺　同

春潮や渚に置きし乳母車　同

等それである。

日小田沙王君の特異なる句境には又芳香掬すべきものが在つて深く吾人の關心を牽ねたことを想ひ出すことが出來るが、君の傾向たる、藝術的に新鮮な芳香をはなちながら、いやに打ちしづまつてゐて、靜寂極まる深潭をのぞき込むやうな氣味惡い感じを受けた。その一種蠱惑的な閑寂な味が一歩をあやまるとすれば千仞の谿谷に陷つるのおそれはあるものゝ、盛るに贏ち、あやうく斷崖の上にとゞまるとするとき、芳烈なる幽香、あだかも蘭花を叢にさぐるのおもひがあつた。

秋の土から〳〵と　殼　つほたる哉　沙王

珊として秋の衣桁や　微　拂ふ　同

天籟や門の秋なる子の遊び　同

「天籟や」の調べの張り、而して內容の明朗さと觸感の良さ「秋の土」と「珊として」の、すさまじい幽寂、古錦を裂くやうな響きとその微光。君も亦惜しむべき天才であつた。

その外、常に好成績をおさめて坦々たる常道を行く作者として、活刀、世燾、波那女、寒々、雨圃、草一路、南海、故東柯、完、夜城、白天、柳之、育川子、逆人、瓢舟、凌宵花、蒼石、晩紅里等の諸君があり、甲斐俳人としても、故煙柳、霞外、虎山、藤吾、舟月、朴人、鳳嶺、天羊、奇有、春浪子、杜史等の諸君が素晴らしい勢を示して擡頭し來るのを眺めて欣快の情を抱きうるものがあつたのである。

一三

伊豫の活東、東京の龍子、茨城の泉楓、千葉の秋去衣、大阪の奏鳳、伊豫の豫風、大阪の奏鳳、大文字、臺灣の美鳥女、大阪の奏鳳、甲斐の楚江、大阪の奏鳳といふやうな各號の順序を追ふて一月號からの卷頭者を示してゐるのが第十四卷のありさまであつた。相比肩して活躍した人々に、伊豫の赤心女、福岡の千鶴女、甲斐の吳龍、佐世保の紅々、伊勢の杉也、濱松の羽公、愛知の斗久刀越南樓、京都の活刀、王石、甲斐の商羊、水戸の葦風、長崎の草人星、臺灣の東柯、仙臺の白嶺、東京の蒼石等の諸君があつた。こゝろみに如上各號にわたる卷頭者としての作句を擧げてみると、恁うしたものが拾はれる。

風やめば日あたりにほふ焚火かな　活東
花籠に菊をあやなす孃かな　龍子
竈火守る兒のおとなしき風邪かな　泉楓
如月や漁やすみたる大炬燵　秋去衣
乙女子や東風の垣根に鍬つかふ　奏鳳
月滿ちて枝だれ櫻の白さかな　豫風
たちまちに霽れ雲わたる瀧見哉　大文字

（病床）枕べや百合に蜂笛起りたる　美鳥女
十六夜や館はふかき夕まぐれ　楚江

形容をもつてするならば、何れも一騎當千の慨があるといふことが出來やう。就中、奏鳳君の此の卷に於ける活躍は最もめざましいものであつて、君の次第々々に築いて來た俳諧の土臺は漸くしつかりと動搖なき坐はりを示したかの感があつたといふのは君が制作にたづさはる上に於ての持ち味がはつきりと作品にあらはれて、掻き抱いた天分のゆたかさが鮮明な光芒をなげるに至つたからである。いま、こゝろみに此の作者をものがたるところの作品數句を採りあげてみるとするならば、

松の實のかずあきらかに仰ぎけり　奏鳳
實となりし萩さわ〳〵と吹かれけり　同
盆波や小舟の海女の髪ゆへる　同
晝中の風にひゞらぐ燈籠かな　同

等、その一般を知らしめるもので、何れも作者奏鳳君の隱逸的に澄んだ個性のひらめきが著るしくやどかつてゐるものである。「松の實」の如きにしても「實となりし」「盆波や」又「晝中の」にしたところで何れも取材と云ひ將た之れが觀かたに於て尋常平板を超ゆる處が明瞭である。とい

ふのは言葉を換へて云ふならば、何時如何なる場合でも苟も句作に從ふことである以上、易きに就くことを一排してゐることである。此の作者については之れまで暫々言及してゐることでもあるしことに本稿は個人評に泥んで全面容を閑却することをゆるさぬ性質を持つ論稿たるが爲めに、この程度で滿足する私ではあるけれども、も一つ幸ひ此の作者に逢着したのを機として云ふておくならば、要するに俳句文藝として奏鳳君の恁うした表現のゆき途は千古に亘つて微動だもせないところの俳諧的正道であり、盤石の重きに任じ得る韻文的本道であるのである。すなはち奏鳳君は、結論的に先んじて云へば斷じて主觀派である。たゞし其れは微妙なるいぶし銀の主觀であり所謂超主觀であることに於ての主觀派であるのである。而して世上あらゆる詩歌は所詮主觀そのものでなければならぬ理であることに於て根本的にいよ〳〵確乎たるものでなければならない。たゞ個々の主觀そのものが自然及人生の實相にやどつて、如何やうに表現されるかゞ問題であるばかり、根底の文學理論に於て個性的主觀の反映は千載を通じてゆるぎない處である。表現が露骨であり、或はひそかであり、或は又ごくなだらかに沈んでゐるさま〳〵な違ひはあるであらう。其の違ひは人の異るごとく異るのが當然でなければならぬ。最も明瞭に言ひ放つならば、主觀派ならざる偉大なる詩人なぞといふものは千古を通じてあり得ないのである。さういふ見界から眼をはなつとして、理論的

に、然る主觀派であるべき此の作者奏鳳君の歩む途が俳諧的正道たることに肯定せられざるべき餘地はない。げにも奏鳳君は、その作品自體が示すやうに、潑剌又澎湃たる主觀を內部に深くひそめながら決してけば〳〵しく行動をとらうとせない恒心そのものが遂ひに十年一日の如く搖ぎない態度を持して今日に至り盤石の土臺を築いてゐるのである。

恁うして、個々各作者に就いて言はんとするが儘に言ふならば、其處に豫風君があり、活刀君があり、草人星君があり、楚江君があり、吳龍君があり蒼石君があり、擧げ來れば恐らく數十指を屈するとしても尙足らざるに至るであらうけれども、それは餘りに廣汎に亘りすぎる難事でもあり、冗漫のきらひなきに非ずとせねばならぬ。が、此の第十四卷に於ては、一言を費しておきたい女流作者に臺灣の渡邊美鳥女君がある。前號で淡路女、千鶴女の二女性作者について少しく述べておいたが、此等女性と相伍して研鑽をつんで來た美鳥女君は、漸くこの第十四卷に及んで天分を發揮してきた。極端な病身であつて、歩行さへも不自由なからだを萬年床に横へて句作に親しんでゐるのだといふことは、美鳥女その人の書簡によつて知るところだが、充分に文藝に理解をもち偶々自身も作句に心を入れることのある夫君秋人君の眞情が、この病作家の心身をめぐつて、飽くまで俳句道に終始されやうとする幸福におかれてあるのである。

丘陵やをよび指しあふ　三日の月　美鳥女

中華人葬列

裸男のさゝぐ青天白日旗　同

の二作の如き、病身を餘外に、はりきつた句道精進のすがたをつたへてゐる。

一四

第十五卷に入つた雜詠欄は、いよ〳〵多士濟々華の如くその絢を競ふに似たものがあつた。個々に作者名を擧げて言ふことよりも、總括的に觀じて、おの〳〵の持つた優ぐれた天分が、鮮かであればあるだけぐん〳〵伸びて其の制作形態が客觀的であるにせよ又主觀的であるにせよ優秀さは優秀さとして顯著なる存在となつて來たのである。とさういふけれども之れは第十五卷として云ふといふことよりも溯つて第十四卷であり第十三卷であり乃至それ以前の各號であつても、勿論然うあるべきであり又私自身の心境に於て其處に重心を保つて當つて來てゐることは言ふまでもないことで、（この事は前にも述べたことゝ思ふが）あるにも拘らず特に然う力說したいのは、當時の全俳壇に回顧の眼を向けてみると、相互關係に於て此方の存在、此方の態度がよりよく明瞭になると思

ふ、といふのは爰に述べるまでもなく、當時の俳壇といふものは、ものすごく大濤のたゝむさまに極端な純客觀的寫生、輪廓描寫の横行で張りきつてゐて、他の論に耳をかすの餘裕は持ち合せぬかの觀があつた。即ち、俳句文藝といふものは飽くまでも客觀的寫生に終始せねばならぬもので個人性が作句それ〴〵に見えないやうになればなるだけそれだけ詩的價値が高まるのであるといふ如き說を中心として（而もそれは文學理論の上に成りたち得ぬところのものであることは曩きにも云ふ如くであるにも拘らず）全俳壇を風靡しようとするありさまであつたのである。然ういふ眞つ只中にあつた我が雲母であつたことは何人も否めない事實である。その大渦中にあつて我が雜詠の通りぬけた道は、いたづらに盲目的な屈服をしない難行を積むの藝術的な一本道の會心事を痛感し通した。それであるが爲めに特に頭書の如く敢て言はざるを得ぬ羽目にあるのである。否言ふの當然すぎる當然さを一と負ひに負ふところとする。

刻下、こゝろみに眼を展じて我が俳壇の全圖を鳥瞰するとしたならば、果して何處にか當時の重箱の隅を楊子でさぐる抵の寫生句若しくは、うるほひの缺如すること趣きの涸渴すること恰も臘を嚙むやうな作句が見當り得るやである。（たま〳〵一隅にこづむものゝ如きは問題外とする）要するに眞理は滅び難しである。正しき文學理論の下に何人かよく逆し得んやである。人言はず、天おの

づから往くべきに往かしめ就くべきに就かしむること千載のもと然りである。

かくて、十有餘ケ年の歳月を一貫して、痛快なる逆境の藝術的甘露を啗んで孜々として力めつゞけた我が雜詠作家は、こゝに極端な限界を持つわけではないけれども、卽ち第十五卷に限るわけではないけれども、俳壇の全面容に眺望してみて安んじて可なりの感を感得したであらうと思ふ。でなければ嘘だと私は固く信じてゐる。

偖て、第十五卷に於ける中の（纔かばかりの摘出にすぎぬけれども）めぼしい側をあげてみるとしたならば東京の竹人、ハルビンの有風、大阪の大文字、甲斐の吳龍、伊豫の豫風、大阪の奏鳳、京都の王石、神戸の墨石、越後の友山、石狩の紅實、東京の蒼石等の諸君が先づ卷頭の作家としてとゞめられてゐる。江雲、仁阿彌、燕石、杜藻、藤邨、彬堂、枯雪、木長、波江野雨石、杉也、麥南、春象、夜城、敏氏、左耳聾、黑旋風、霞外、東洋、泊春、眞也、梅白、南海、石堂、皿秋、蘭夫、梅堂、草人星、一誠子、完、白嶺、不釣、蘇南、芳蘭、唐淵、等々の諸君がこれに相比肩して遜色なき作品を以つて當つてゐたことは卷を繙けば一目瞭然たるところであつた。

今、既往を餘外にして前者の例の作句を拾ふとするならば、

白菊のたそがれさむき光りかな　竹人

山宮の笛きこえ來る汐干哉　有風

夜遲くもどりてぬくき炬燵かな　大文字

ましろなる山雲ちかみ蟬時雨　吳龍

花簪りふすぼりもなく更けにけり　奏鳳

青柳にときじく雨や壬生念佛　王石

夢殿や斑鳩わたり春がすみ　墨石

燒芋の口かんばしくありにけり　友山

酒井戸の鍵もの〳〵し注連飯　豫風

牧草の花にほはしや濃むらさき　紅實

秋耕のもろ乳たる〻嫗かな　蒼石

等をあげることが出來る。それ〴〵を味讀、鑑賞することに於いて雜詠欄に於ける此等尖進者だちの詩境が如何やうにあるかは贊するまでもないであらう。

更らに爰に、これまで此の文稿中に顏を見せなかつた作家で、この卷に於ける精進のすがたを拾つてみる。まだ〳〵多分に述べのこすところはあるけれども作品だけを擧げる。

簷朽ちし大玄關や籾むしろ　藤邨
吾妹子の机の上の懐爐かな　柴田完
陰どけや置きくづれたる炭俵　蘭夫
佛堀り手に珠數かけて冬の寺　梅堂
冬晴や丸髷小さき妻とゐる　白嶺
凍てがほにうつぶし見るや社會鍋　不釣
嶋里や舊正月の船飾り　泉楓
籾を干す匂ひの中にある身かな　枯雪
露の芝とばして刈れる利鎌かな　雨石
葛の花こぼれつゞける泉かな　木長
うまし穂をかけし籬や鯊の秋　一誠子
盆浪のとゞろとひゞく精舍哉　耳郎
藪風やきのふけふなる誘蛾燈　杉也
宿痾（ナガヤミ）の鉢福壽草葉となりて　黑旋風

春曉や竹に雲おく山館　霞外
高汐に嶋見えて町は薄暑なる　東洋
釣堀や黄揚たそがれて花こぼす　左耳聾
げんげ田を降りかくしたる大雨かな　紅々
萍にたゞ一と花のあるばかり　蘇南
かんばせに繪團扇おいて浴後かな　彬堂
春旅や包みにおさむ髮道具　梅白
刻みたる手にうつり香や風邪藥　敏氏
あともどりして永き夜の窓を訪ふ　江雲
鳴子繩雨夜明りに張られけり　仁阿彌
梅雨あけの月澄みわたる一樹かな　逸見
初夏の衣笠山や杉の穂に　詠風

最早や第十六卷とか第十七卷とかいふことになると、斯篇の最終完結をつげる意味に於て眞に昨日のことに屬するわけである。さて、第十六卷に於て、第一號から第十二號までに至る、活躍しためぼしい作家をふり返つてみると、第一號に於ては蘇南、墨石、寒々、杉也、友山、紅夢、江雲、柏人、千鶴女、蒼石、左耳聾等。第二號に於ては旨縫、奏鳳、友山、冬青、嫦娥、楚江、豐治等第三號に於ては千鶴女、柏人、麥南、斗久刀、草人星、吳龍、杉也、故雨丈、杜藻、草一路等。第四號に於ては、藤邨、眞也、奏鳳、寒々、野葡萄、美人蕉、淡路女、完等。第五號に於ては青芒、唐淵、草一路、友山、奏鳳、杉也、有風、刺泡、江雲、蓼汀等第六號に於ては、奏鳳、墨石、岑月、四十雀、杉也、南石、草史、楚江、藤邨、大文字、鵜谷等。第七號に於ては左耳聾、春月洞、眞也芮城、鵜谷、竹人、吳龍等。第八號に於ては巽、寒櫻草、味三夫、抱雲、枯雪、流星、鍬江等。第九號に於ては藻路、色葉、淡路女、竹人、四十雀、櫻宇、芳月、司笑等。第十號に於ては、東洋、枯雪、大文字、有風、松居、葉柿樓、芳葉、蒼石、空葉、鵜谷、柏人等。第十一號に於ては、葉柿樓、燕石、藤邨、杉也、千鶴女、露鳴、暮雪、枯雪、雨石(鹿兒島)、東洋、草人星、色葉、唐淵、冬嶺星、四十雀、蒼石、泉楓、黑旋風等。第十二號に於ては、吳龍、波重、豐治、杉也、有風、故東柯、東洋、松居、美鳥女、唐淵等の諸君を擧げるこるが出來るのである。もちろん猶其の他を拾ひ來れば枚擧に遑ないありさまであるが、凡そ卷頭より一二頁を限度としてこゝろみに擧げてみたのである。之れを通じてみるに、第十六卷に於ける優秀なる地位を占めてゐる作者は勿論これまで活躍しつゞけてゐる人々、たとへば寒々、千鶴女、奏鳳、楚江、草人星、眞也、淡路女、吳龍、大文字といふやうな諸君のあることはあるのだけれども、むしろこれらの諸君を凌駕せんばかりの勢を以て押し進んだ優秀作家は以上列擧したところに觀て瞭らかである。とりわけ、その地位を襲ふことに於ての新顏として蘇南、旨縫、杉也、青芒、有風、岑月、四十雀、左耳聾、春月洞、鵜谷、竹人、巽、寒櫻草、味三夫、鍬江、藻路、色葉、櫻宇、司笑、東洋、松居、葉柿樓、芳葉、柏人、燕石、冬嶺星、波重、豐治、唐淵等の諸君があつたことは特筆せねばならぬところである。

すべての文藝、藝術に於てそれ〴〵の作家が個々その魂をかきいだいてゐる以上、濃きにせよ淡きにせよ、其れが個人的持味を泌ませないものは無い筈である。このことは之れまでにも暫々述べたことであるし當然すぎる當然でなければならない。だが然しながら、理論上然うなければならぬ筈であるものゝ、さて實際についてみて、文藝、藝術の總ては云ふまでもなくはかりを用ゐて何匁何分の量目を示す抵のもので有り得ない限り、其れが甚だ稀薄なものであるとなると、これが識別鑑賞に決して容易なものではない。もつと踏み込んで云ふならば、極めて初歩な、作者側にあつて

は這個の短詩形に於ける作品の上に分明なることと殆んど稀だといふても過言でないことを知るのである。然るに一朝、修道をつみかさねてから、一個優秀な作家側になるとすると、這の境、立派に而もあざやかなる個性を示し來るを見るのである。今、こゝろみに前掲數十氏の作品を採りあげることゝするならば、

すゝきの穗とけかゝりねる月の前　蘇南
草庵のうしろの小田の蟲送り　杉也
寒風ぎに鐘のきこゆる渚かな　青芒
燈臺にひとり遊べる暮春かな　有風
殘雪の減りつゝ塵のかくれなし　岑月
ひとりねに晩涼の星流れたる　四十雀
笋の蝶もろがへる露げしき　左耳聾
もろともに家出人なる布團かな　鵜谷
死雲雀棄てたる籠を洗ひけり　竹人
ゆく春の馬のあまゆる小鞭かな　味三夫
鮎を燒くほこりのかゝるつむり哉　鍬江
庭池やしづかに花のあさぼらけ　藻路
空蟬や掃きおくらるゝ甃　色葉
つれし子の客くつろぎぬ晝寢顏　櫻宇
大年の鐘きこえ來し一路かな　東洋
初月や風ぎわたりたる和田ノ原　松居
わらんべのほろりとさむき裸かな　葉柿樓
花柘榴ちりねて山の出水かな　芳葉
毬割れしわせ栗の實のあらはかな　柏人
猪垣や草藤からむ露げしき　冬嶺星
山祇に月見の酒を灑ぎけり　波重
わすれなく蟲もかそけし玉かづら　豐治
干栗に露おきそめし月夜かな　唐淵

等の如き作句を列擧することが出來る。これが一つ〳〵に就いて評釋づけ作者その人をあげつら

ふこと必ずしも難事ではないが、冗漫にわたるを避けることゝして、其の二三を適宜ひろひ上げてみるならば

蘇南君の、

すゝきの穂とけかゝりねる月の前　蘇南

の如きに就いてみるも、此の作家の常に落着いた、低調に出て言ひ知らぬ滋味を其の客觀的なものにやどしてゐる持ち味は充分に認めることが出來る。又杉也君の、

草庵のうしろの小田の蟲送り　杉也

にしても此の蟲送りがたゞ單に田ノ面に行はれてゐることを詠じたものでは其處に際だつた個性的な些の閃めきをも見出し難いであらう。

この作句に於ける「うしろの小田の」と、草庵背後の夜の一景に看點を置く此の作者の用意は決して輕々に看過し難いものがあるのである。斯の機微なところに個性的躍動を認めねばならない。

鍬江君の

鮎を燒くほこりのかゝるつむり哉　鍬江

の如きも亦然うである。まことにさらりと叙し去つて、淡味或は一瞥を與へられざるかの外觀を持するものであるが、之れを味讀するに從つて、一見をどけたるが如く幾分滑稽な感じを受ける裡に大眞面目な、詩美ゆたかなるものを掬することが出來るのである。爰に作者鍬江君のはつらつたる個性を認めることが出來る。

更らに、松居君の、

初月や風ぎわたりたる和田ノ原　松居

に於ける多少の古雅な味を引いた穩健な作風にひそむ個性、葉柿樓君の作、

わらんべのほろりとさむき裸かな　葉柿樓

に見る新鮮味。それは實に此の作者の顫へるやうな纖細な神經が持つ詩人的な風格でなければならない。柏人君の、

毬われしわせ栗の實のあらはかな　柏人

この微かなる、近代詩人が持つ寂びの味はどうであらう。作者柏人君の臟腑を割つて此處にさらけ出したものに外ならぬと言ひ得るのである。

此のやうに何れもの作家が歳月を重ねて修練を積みに積むの時、當然の結果として作品そのものが個人性を躍如たらしむることになるのであるが、我が雜詠欄に於ける展望は、最早やすでに、餘

りに多くの斯かる作家を網羅し來つた。私は、寧ろ筆紙の盡しがたい澎湃たるものを感ずる。

要約して謂へば、第十六卷のけんらんさはいよ〳〵あざやかな個性の躍動そのものだと云へるのである。多年こゝをめざしこゝに重點をおいて押しすゝめた我が爲事が欣快なる進轉を示したことであつたのである。

一六、

第一號より第十二號に至る卷頭作者及その作句をあげてみる。

爽涼の掃きやぶれたる一葉かな　冬青
雲上の日輪寂と冬げしき　有風
秋深き縷紅枯蔓風にあり　松葉女
懸る灯や年立ちにける古蔀　眞也
雪もよふ月うす〳〵と桐畠　藤衣
寺町の雲ゆきはやき雨月かな　龍焉
雪解やいつきまつれる山やしろ　活東
大濤になぐれて秋のつばめ哉　奏鳳
病む妻のはや忘れゐし團扇かな　東洋
いでたちの尼僧ともなし枯木作務　千鶴女
老の手にしつかりとうつ碪かな　淡路女
あさあけの石の面はしるいとゞ哉　蒼石

此等いづれもの精鋭、俳壇的におほき力量を示して餘りあるものだと云ひ得るであらう。これまでたま〳〵說述の上にあらはれた名は預るとして、冬青君の瀟洒として、而も飽くまで正道を踏みあやまたざるの用意。松葉女の清爽。こゝにあげた一作の外にも、この頃幾多優秀の作をとゞめたのは、偉なりとするに足るものがあつた。當時、君はたしか夫君に病歿され遺兒四五人を抱いて雄々しくも一家の生計をさゝへながら、一つに心を俳句道に傾けて、慰安をこの一と筋にもとめたものであつたことの縷々たる通信に接したことを記憶する。君の俳句研鑽に於ける歲月たる、決して然う長いものではなかつた。それにも拘らず所產の作句は冴えに冴えた。もちろん搔き抱いた天分の然らしむるところだとは云へ、一面又心をなげかけた努力のいたす處だと認めざるを得なかつたその後君がまた病床の人となつて消息の絕えてゐることを頗る不安に思つてゐることである。

藤衣君の雅致に富む技巧。龍焉君の本格的な慥かさ。さうして又活東君のあくまで詩人的な性格に加ふるに修練第一を心懸ける努力。君の作句に就ては、別に多少の説を掲げたこともあつたが、純一に吾人の主張と合致して、坦々たる句道の眞唯中を驀進するところ、一面けん虚なる心事を物語つてあまりあるものでもある。東洋君は素、土佐の産であるが、今墨國に居住する。本欄に於ける活躍は渡航前かたからすでに年久しいものであつた。温雅なる性情おのづから作句にやどつて、何れも親しみ易い好感を與へるものが多い。

空はえて櫨の色づきそめにけり　東洋

茶畑の冬めきそめし焚火かな　同

寡言もて師恩にむくゆ御慶かな　同

等の如き、もつともよく其の心境を展じ風丰を示すに足るものでなければならない。

ことに此の卷に於ける眞也君と有風君の活躍はめざましいものがあつた。眞也君は、有風君よりはるか前かたから雲母誌上にあつて精勵惜しむところなく力作を寄せつゞけつゝあつたのであるが君の多年の努力研鑽は漸く大磐石の慥かさを示して來たものであつた。

朝焼のすゞろに雨やかきつばた　眞也

舞ふ獅子にきほひて笛の高音かな　同

大いなる眞菰の月の舟路かな　同

早稲舟つぎ〳〵葦にかくれけり　同

夕影や菊の名札の吹きまろぶ　同

等その力作の一部とするに足る。君の獨創的な、斬れ味のよい——狷介に似て非なる一種犀利なる性情のあらはすところのほのかなるものは、之れが作品の一つ〳〵に味到することに於て全く異色あるものとして認められねばならなかつた。心のどん底に強い信念を横へてゐることに因るのである。こゝに擧げた作句の如きは遺憾なくその風丰を示すものである。

有風君にあつては、この欄に於ける記錄からいつて眞也君とはだいぶかけはなれた時期の顔出しであるけれども、君が俳句研究の歳月乃至俳壇的生活の閲歴からいふと相當の古顔でなければならない。學生々活の頃から故乙字等と風交をあたゝめ、碧梧桐氏の一派に交はつたりして才氣煥發の冴をみせたことが尠くなかつたといふことである。もちろん、現在のホトトギスが抱く中堅どころの作家諸君と期を等しうするものと見てあやまちないであらう。さうした詮索は兎も角として、我が雑詠欄に於ける有風君の活躍は、すでに前かた一作家として顯著なる存在を示したことの摘錄に

よつて知らるゝところでもあるが、いよ〳〵詩才の冴えを露はにして、ゆくに可ならざるなき鋒芒をしめし來つたのは此の卷前後にあるといつて宜いであらう。

探梅行舸夫あけぼのゝ櫂をとる　有風
列島にきこゆる鐘や麥の秋　同
飯濡らす御祓の雨となりにけり　同
噴水に花薔薇もろくなりにけり　同
眞夜の月赤城をてらす添水かな　同

等の如きはその代表的なものとするに足るのである。君の卽興的な諷詠の才、それでゐて沈思練研又時にこだはるところ無しともしがたいが、詩文に關心をもつ青年學徒誰もが必然一と通り舐ぶることのやうに、此の作家も亦時に或は長詩、或は短歌に、その他智識欲のむかうところ、俳句といふ文藝道の過程をたどることのそれが假りに偶然だと云ひ得たとしたところで、尠くとも新鮮味を豐かならしめる何物をか獲得せねばやまなかつた素地が附與されてゐたことであつた。後にこの欄以外にあつて

燈臺は白くかなしき牡蠣の宿　有風

犬と棲む燈臺守や秋の風　同

等に檢討を加へるとなると、その消息をつたへて分明なるものがあるのである。

敢て此の二作家をもつて、第十七卷活躍線上の代表者とするわけではない。相比肩してめざましい進轉ぶりを示した側として、大阪の如星君があり、撫順の逐天君があり、伊豫の司笑君あり、今臺灣に軍醫として赴任しつゝある柴田完君があり、甲斐の梅童、虎山、洒蝶及び舟月、秋月の諸君因幡の兎子、臺北の松葉女、筑前の岫石、大阪の鬼風、伊豫の香菊、佐世保の步魚、甲斐の藤吾、紫明。京都の故雨丈、釧路の嬋娥、尾張の斗久刀、伊勢の冬嶺星、椿石、柴人の三君。名古屋の逸美、熊本の菓村、佐世保の故紅々、足利の汀草、埼玉の晩紅里、東京の佐海、彈丸、半春の三君。伊豫の香菊、水戸の清芳、土浦の仙風、横濱の土化、磐城の澄女、東京の葉津女、ハルピンの凡水鯉城兩君。伊勢の春水子、京都の王石、麥雨の兩君。朝鮮の清流壁、大阪の狐草、史朗の兩君。岩代の世蕉、甲斐の鶯山人等の多數を拾ひあげることが出來る。この後、漸く堂々たる風格を示して來た朴余子君の如きもこの邊に最早や鋭鋒をほのめかしてゐるし、後年の新鋭なる作家青水草（鯉城）君の如き、そも〳〵こゝに天分あるひらめきをのぞかせてゐるのである。或は四十雀、鶯谷樓兩君の如く多年俳壇に濶步をつゞけて來て、極めて穩健なる作風を示してゐる中に矢張りそれ〴〵

の持味を淡々として泌ませてゐる向き。或は又古索君の逸脱、枯淡なる。世薫君が十年一日の如くに研鑽をつんだ結果が、漸くこの卷以後に於て、大河の決するが如く獨自性のほとばしるところ、その他枚擧に遑ないありさまである。

こゝに回顧的感想の拙稿を結ばうとするにあたつて、此欄にあらはれたるところの作家の全展望をほしいまゝにすれば、大概の傾向的分類が、おのづから念頭に湧き來るものあると同時に、さらに個々それ〴〵のあざやかなる作家の性情燎原の火の如くなるを知るのである。

皿の上に秋二たいろのトマト哉　世薫
蛸しばし愁ひがほなる秋暑かな　如星
見てゐれば次第に暗き雨月かな　逐天
三日月や汐まち舟の巖がくれ　司笑
苗代や新高山は雲の中　柴田完
鹽田守歩けばたちて夕千鳥　岫石
月にとぶ柳絮の中の渡舟かな　凡水
初夏の人船着きに來て佇めり　半春

夜の菊冷え〴〵と葉の濃かりけり　舟月
着飾りし奉射の衆や春の霜　清流壁
送行の濤にかくるゝ船もあり　王石
香水やゆきずり人に道昏き　佐海
旬日のかよひ湯治や麥の秋　澄女
しだり尾のながき飾りや伊勢の宿　春水子
浴佛のかげのしづまるしばし哉　狐草
雨意ふかく藤波あやに暮れにけり　彈丸
帆面てに吹きちる浪や雁渡し　歩魚
(登別)溫泉の谷の水の秋なる硏かな　嬬娥
漂泊す火田の民や夏がすみ　鯉城
一と雨の降りゆきにける誘蛾燈　鬼風
ながらへし身のいれずみや菖蒲風呂　清芳
いざよへる山端の月や水の番　香菊

松の葉のさゝりて咲ける辛夷かな　逸美
むらさめにはなれ〳〵の遍路哉　菓村
いみじくも革手袋の鳴りにけり　故雨丈
涸瀧や書院の深く客通す　虎山
熱燗や泡のかたよる小盃　藤吾
稲波のよせては土手の曼珠沙華　兎子
春風やねむれる鴉に水のあや　斗久刀
さんざめき谿にこたふるキャンプ哉　麥雨
流れゆく七夕竹を搏つ燕　史朗
樋漏水受く朽桶や蕗の薹　汀草
大花火ひらききつたる信濃川　土化
ひとの庭ひそかにぬけて墓參哉　鶯谷樓
ぬた芹に杉箸匂ふ佛事かな　梅童
芽ぶきつゝ古葉をおとす椚かな　仙風

下枝や吹かれて一つ遲椿　四方
地震あとの陽のさす垣や花木槿　夜琴
秋蟬や松まばらなる多摩の山　紫城
爐明りにうちはじめたる碪かな　野葡萄
はこばれし蘭麝のかほり秋袷　鏡女
厨なる秋の團扇の色つよし　岳南
秋燕に裏山青し善光寺　眞琴
十字架をさげし童女や秋の薔薇　空葉
裏富士にある一抹の雲も秋　雪彌
花梛子に老鶯なくや厠橋　三法子
大梛子の月もなごりや除夜の鐘　一鳴
一握の土のぬくみや薔薇うつす　曉雨
門燈に雪おちきたる影のあり　虎山
山櫻みだれて浸る懸樋かな　春山

畦塗や簑吹きまくる風に堪ゆ　晩紅里

春眠のまくらに近し筆硯　藤衣

(身延)骨堂に日のなごみたる櫻かな　紫明

大霜や磴にふむもの〳〵蔓　洒蝶

草の戸にもの〳〵しさや飾り臼　秋月

老松を雨のしたゝる焚火かな　鶯山人

言はんと欲するところは無限である。この種の説述はまた稿を改めてするの機を得たいと思ふてゐる。

第二篇（講演篇）

藝術的心境の高さ

俳句といふ極く短い詩形の文藝が、我が國に生れ育ちまして、四百年このかた、我が文學の中に、確たる一地歩を占めてをりますことは、改めて申すまでもないことであります。も一つ決まりきつたことを冒頭に申述べますと、素より藝術作品と申すものは、その形が大いから藝術的價値が高いとか、又、その形が小さいからして藝術的價値が低いとか、さういふやうな事はございません卽ち、その使驅する文字の饒いとか少いとかいふやうなことで藝術的價値の決せらるべきものではないのであります。これを最も肯き易い卑近な例にとつてみますならば、皆さんが街をお歩きになつて居られる場合、試みに眼を上げて御覽になると、乾物屋の看板だとか、小間物屋の看板だとかいろ〳〵な繪の具を用ゐて畫き上げられた繪看板が眼につきませう。一見なか〳〵立派に出來てをつて、街路を行く人々の眼をひくのであります。繪の具も澤山の繪の具を用ゐてをれば、又繪面も廣い繪面

に畫かれてをるのであります。これは事實上各一つの繪畫であることに間違ひはありません。然るに此等の澤山の繪の具を使用し、廣い繪面を有する繪畫が、今の畫壇にある結城素明氏だとか、横山大觀氏だとか、或は川端龍子氏、竹内栖鳳氏等が畫かれた二三色とばした簡素な小品に比較してみまして、同じ繪でありながら市價は非常な差を示してをることを何方も御承知のことだらうと思はれます。少々俗な申上げやうかもしれませんが事實さうであります。これは藝術價値といふものに於きまして其等の看板繪が以上擧げたやうな大家だちの作品に遠く及ばないからであります。繪畫の場合ばかりでなく、小説などに於きましても、現在發表されてをる處の大長篇小説が必ずしも島崎藤村氏とか、菊地寛氏とか、或は故人としても國木田獨歩、芥川龍之介といつたやうな作家の極く短い或る作品を凌駕することがむづかしいといふ理由は此の藝術價値の低いところによるわけであります。啻に繪畫だとか小説だとかいふばかりでなしに、總て藝術的作品に對して云ひ得ることでありまして、そこで藝術的價値といふものは然らばどんなものであるかと申しますとこゝで手短かに申しますことは困難でありますが、強いて申せば、要するに總ての文藝、藝術作品に打ち込まれたところの作家それ〴〵の藝術的心境の尚さにあるものだと解しておいて頂いて遺憾ございませぬ。

も少しく俳句の領分にかゝつて申し上げますならば、曩きに申しました通り、俳句は全世界に行はれてをります詩歌中最も短い詩形を有するものでありますが、我々俳人が其の最も小なる詩形たる俳句といふものに憑りながら、外の積んで等身の嵩さをなすやうな著述文藝作にもさしたる壓迫を感ずることなしに、此れに一生を托して晏如とした故人正岡子規の如きがあつたやうに、そのやうに、亦我々も泰然自若たらんとする所以のものは、實にその點に存する處でありまして、昔の事實に照らしてみましても、アノ芭蕉が漂々浪々の旅をつゞけながら、或は一ケ月に一作をなし上げ或は二ケ月三ケ月に辛うじて一作を吐くといつた懸命さ、此の人の魂を打ち込んでの精進さの結果から、一集といふものは、皆さんも御存じの通り、懐にして餘りあるところの小さな一卷でしかありません。めざましい秀作といふやうなことになると恐らく百句にも滿たないであらうと私は常に感じてをるところであります。それであるにも拘らず、此の人の詩作が、當時元祿文壇の幾多の長々しい戯作を足蹴にして、ひとり光りを放つてをるのであります。古今人が一様にこれを認めて、千載のもと光芒を曳くと云はるゝ所以のものは、實に彼芭蕉の詩的な魂の清澄さ、さうして高さ、さうして美しさが根柢を做すに因るものでなくてはなりません。

芭蕉といふ人が、一作を爲しとげる上に、彫心鏤骨の苦難を積んだことは世間餘りに知りきつた

事で、今更申述べる必要もございませんが、今も申します通り、表現的技巧に懸つて一心不亂だといふばかり、或は其處に日月を費したとみるばかりなのは、未だしい觀察でありまして、此の人に就いて最も注意が拂はれなければならぬところは、俳句といふものを無理やりに出さうとして出すのでなく、拵らへやうとして作り上げるのでなしに、芭蕉その人の心に、おのづからうつぼつたるものが疊んで來て、止むに止まれぬ場合、卽ち腹の底から湧き起つてくる詩塊の勃發が壓へきれぬものを、極めて自然に守り育てゝ出すといつた處に獨自の詩的價値を荷ふものであると觀ることでなければ正鵠を得たものでないと私は信ずる者であります。この點を私は特に力强く申述べておきたいと思ふ處でございます。芭蕉の場合、勿論大部分の作句はこれに適例さるところでありますがその一つ、人口に膾炙したものを採つてみましても、「其便」――泥足編、元祿七年刊行。――といふ本の中に

所　思

と題しまして、

この道や行人なしに秋の暮　芭蕉

といふ一作があります。此の句意はどういふことかと申しますと、お聽きの通り何等難かしい意味はないのでありまして、旅人芭蕉が恰度秋も末つ方、而も夕暮れかゝらうとする頃ほひ、道のべに佇んで、あたり四方を見渡すと、まことに淋しい蕭條たる景色であつて、自分以外には人つ子ひとり見えない。ましてや自分のやうに行方定めず長途の旅行を續けてとぼ〳〵と歩いてゐる者は見當らない、淋しいことであるといふ、然うした旅人としての感懷が胸にしみ〴〵と宿つたとき知らず〳〵五臟六腑を衝いて湧き上つたものが此の一句だつたのであります。我々鑑賞側の立場で、この一句を味讀することに於てさへも、當時の芭蕉といふ詩人の心持ちと其の風貌とが、まざ〳〵と眼前に展開し來つて、髣髴たる其の情景に味到し得られるのであります。芭蕉といふ人は、それが濃きにせよ、淡きにせよ、恁ういふゆき途をとつて詩作にたづさはつて居りました。であるからして門人曾良の如きにしましても、芭蕉と一緒に例の「奥の細道」の旅をつゞけたとき、腹痛を起して加賀の國から、芭蕉より一と足先きに、伊勢のゆかりを尋ねて行く積りで、獨り泊りの第一夜を、全昌寺といふ寺に泊ることになつたのでありますが、恰度其の晩、夜すがら寺の裏山に夜風が吹き渡つてをりました。で、曾良は、極めて自然に腹の底からしみ〴〵湧いた一句を紙片へとゞめました。

終宵秋風きくやうらの山　曾良

これは旅泊當夜の其の儘のごく解り易い自然な詠みかたであります、けれども此の平明な作の裡に、曾良の、腹痛になやむ淋しい遣る瀬ない情はたつぷり宿つてをることを、皆さんもお感じのことゝ思はれます。一と晩遲れて、矢張り此の全昌寺へ辿りついて來た芭蕉が、之れを見たとき、彼はどんなに感じ入つたでせうか、「一夜の隔り千里に同じ」と、述べてある處をみましても、芭蕉の胸中を察するに餘りあるものがあります。芭蕉ばかりでなく、今日、四百年をへだてた此の詩に接するとしましても、我々が異常なる感激に打たれるところであります。

偖て、こういふ、側の千古に亙つて、人心を搖り動かす力を備へた詩といふものは、それが、環境とか取材とかいふものに因ることも、勿論見逃せないに相違ないのでありますが、最も主要なものであり、その心核たるところのものと申すのは、曩きにも申述べた處の、無理やりに出さうとして出すのでなく、拵らへやうとして作り上げるのでなしに、心におのづからうつぼつたるものが漲つて來て、やむにやまれぬ發露である處に歸着せねばならぬのであります。

我が俳句に於ける此の行き途といふものは、獨り芭蕉や曾良ばかりでなく、又昔といふばかりでなく、今日としても、決して變るべき筈はないのであります。たゞ、人間一個に就てみましても、芭蕉こそ風羅坊の名のもとに頭を坊主にしてをりましたが、總て頭に髯を頂いてをつた御承知の時代でありまして、風羅坊の一作が示します通り「一つぬいで脊中に負ひぬ衣更」といふやうな時代であります。さうした時代のチョン髷色なるものは、其の後の時代の小林一茶の作句などにみましても

これがまあ終ひの栖か雪五尺　一茶

といふ風に表はれてをります。此の作に見る「これがまあ」といふやうな上五文字の如きは、如何にもチョン髷色が濃厚なものでありまして、現代人の誰もがにとつて、到底使驅しがたい、よし又假りに使用したとにろで、決して身についたものでないことは明瞭であります。それは假裝會に於てばかり役だつものでしかありません。

偶然、こゝに引き出された一茶でありますが、此の句をつくつたのは、一茶晩年のことでありまして、其れまで彼は持ち合せた詩才にまかせてから、

一尺の竹に毎晩凉　みかな　一茶

御馬の汗さまさする木蔭かな　同

飴ん棒横に咥へて初袷　同

鞍つぼに三つ四つ六ついなご哉　同

といふやうな安價低調な所調寫實的な作句を拵らへつゞけてゐたのでありますが、それが、齡を重

ね、身は旅に疲れ過ぎまして、衣破れ行くに處なく、漸く故郷信濃の柏原の里に辿り着いたとき、生涯體を廻りつゞけた血汐をば、一團とした血塊を吐き出すやうな鹽梅で、吐かざるを得ず、詠まざるを得ない、おのづからなる心の姿に於て「これがまあ終ひの栖か雪五尺」と詠みいでたのであります。句の意味は、最う自分は何處へも行くべき處はない。此の雪積る故郷の柏原で往生するより外はないといふ感懷なのであります。人間一茶、詩人一茶の眞實なるうめき聲をはじめて聞くのであります。此の心境には、彼が惡しき意味の詩才を振り廻はす處のものは微塵も影をとゞめません。全く清淨たる詩人一茶になりきつてをるものでありまして、私は、晩年に於ける此の一作の爲めにでも一茶といふ俳人が救はれる大いなるものゝあることを痛感する者であります。

で、此の點は尙、腹底から湧き起る俳句の側を强調するに過ぎぬものでありますが、前へ戻つてお話し致しますならば、以上擧げたやうな故人だちの時代と、だいぶかけ離れた今日にしましても草鞋で歩くのが、時に汽車とか自動車とかにより、頭髪の如きも、髷こそつけてをらないけれども然うかと云つて、一茶初年のやうな安易な寫實に加ふるに、唯纔かに小器用な近代味をもつてして手先きで作り出す作句に饒くの價値を認めるわけには參りません。時代が如何に移り變りましても俳句道といふ此の文藝道の精神に於きましては、些の變るところはないのであります。言葉を換へて申せば、飽くまで自らなる詩的流露に俟つこと近代人は近代生活に卽して詩作するといふことは、必ずしも、手の先きで淺薄安易に寫生しなければならぬことではないのであります。天明以後の俳句が墮落したことは、瞭らかな事實でありますが、さほど風流も感じないくせに風流めかして、面のろをかしさうに詩歌の上で、これを詠ひ裝つたところの共の低劣輕佻さと、現代の安易な句境と白差は、ごく纔かの離れかたでしかありません。或は同列に置くことも出來やうかと私は存じます。何故かならば、俳句道本來の行きかたを沒却して、徒らに手の先きの小細工をこれ事とすることにたいした差異を認め得られないからであります。手の先きの小細工として觀察される、瞭らかなものゝ一つの傾向として、連作俳句と云ふものを見出すのであります。御承知の通り、この連作俳句と申しますのは、五句なり七句なりが、一聯を成す綜合體と見るべき一詩品の鑑賞に俟つものでありまして、俳句といふものゝ上で、近代世相の影響から、比較的皮相な考察によつて、一と頃の新傾向なるものより少しばかり頭のよい、又少しばかり敎養のある人々が、個々夫れ〴〵のやゝ複雜な感じを其の儘に、無理といふことは深く意識せずに、寧ろ天晴れ新機軸めかして、尖端を行かうとするものに外ならないのであります。

私は、この連作俳句なるものに對して、一つの事象をめざして、四方八方からさま〴〵に觀察を

下すことが、別に、おのづから心膽を流露する一個玲瓏たる俳句の表現に資すべき途上のものとして、修練的に或は階梯的に、必ずしも見捨てるべからざる程度に之れを認めてはをる者でありますが、念の爲め附け加へて申述べておきますが、恁うした俳壇一角の新流行を排撃するといふことは、決して私どもの作句態度が、現實を回避しやうとするやうな態度から來てゐるものでないことは勿論であります。何となれば、吾々が如何樣に芭蕉を思ひ、古俳諧の大道を說いたからと申して、現代に生を享けてをる吾々は所詮飽くまでも吾々でしかないからであります。

その昔、住吉の社前に於て一日二萬三千句を作つたいふて誇りとした伊原西鶴の濫作が、其の後の社會から見る影もなく葬りさられてあとかたもなくなつてをります。それと正反對に、今も申す通り月がかり年がゝりでこつ〳〵と懸命な詩作にたづさはつた芭蕉の作品が後世ます〳〵其の光芒を曳くところのものは決して所以なきに非ずでありまして、之れ一つに前者は小手先から作り出したものであるがために早くも光りを失つて地に墜ちて終ひ、後者は滿腔の詩的情熱をもつてして所謂腹のどん底からしぼり出す作句態度から產み來つたところに起因するものであります。

其處で、私は其のやうな俳句道本來の面目は、飽くまで、手先きの小細工をさけ、懸つて人間胸奥のおのづからなる詩的流露の根源に憑らなければならぬと信ずる者でありますが、然らば、前にあげた故人だちの作句以外、近代的な正道をあやまたない側のものとして、如何なる實例を擧げるかと申しますと、いくらも有りますが、爰に其の一つを採りあげけて簡潔にお話し致します。このお話しを致すことによつて、私の俳句談を結ばうと思ふのであります。

高濱虛子翁のだいぶ前の作に

秋日和子規の母君來ましけり　虛子

といふのがあります。此の作者と正岡子規との間柄は、御承知の通り深い師弟關係にあつたのでありまして、作者にとつての恩師たる子規居士は、既に明治三十五年に死歿してをりますが、その子規居士の老母が、或る秋晴れの麗らかな日和に作者の住居を尋ねて來たといふ場合を詠んだのでありまして、お聞きの通り句意に何等の難かしいところもございません。が、こゝろみに解釋して申上げてみますならば、秋日和に尋ねて來た老婦人を呼びかけるに、「母君」と申し、又「來ましけり」といふてをります。この、敬し、なつかしむ言葉を用ゐて居る處から推して、此の作者がどんな態度で老婦人を迎へたか、又老婦人は如何なる心持ちで迎へてくれる作者に會釋したか、さうした、人の世に生存して、何時如何なる時代になつたところで變る筈のない、正しき人間道を踏む美しい人情の、てんめんたる場面が、まざ〳〵と眼前へ展開することゝ存じます。此處には決して無理に

拵らへやうとして拵らへ上げたけいせきもなければ、眞におのづからなる感情のもとに流露された詩作たる外、何物でもないことを信じ得られやうと思ふのであります。

俳句はこれで結構でありまして、こゝが又、古今を一貫する慥かな正道なのであります。たゞ一と言申上げて置かねばならぬことは、然らば事實を斯様に、有りの儘に直敍するといふことは、匹夫も亦詠じ得べきではないかといふ疑惑が起るかも知れぬことであります。由來、俳句といふ文藝は、日常の御飯を食べるやうなもでありまして、決して難かしいことは要りませぬ。であるからして、勿論何方にも爲さうと心ざしさへすれば、直ちに出來るのであります。然うでありますが、先づもつて此の一句の上五文字に「秋日和」といふ言葉を置き、來訪された子規母堂を、なつかしむまゝに、斯様に字句を驅使、按排するといふ技倆に至りますと、も一歩申しますならば、斯様な修練と詩的教養と云ふことに考察を加へますと。決して一概に誰でも無暗に詠じ得られるものだとは申せないのであります。即ち若干の修練を必要とするのであります。

終りに、俳句といふ文藝は恁うした軌道によるべきものでありまして、冒頭に申述べたところの藝術的心境の高さをめざす、所謂「腹の俳句」に心を打ち込むことにかゝつて、句道の眞意義を見出す所以のものであります。

（昭和九、一、一八。仙臺放送局に於いて）

現代婦人の生活と俳句道

爰に「生活と俳句道」と題して短時間お話致したいと思ふのでありますが、主として婦人の生活に關心をもつてお話し致すことで御座います。豫めそのお積りでお聽きを願ひ度う存じます。現代人心の不安定な狀態に置かれてありますことはお互痛切に感じてゐる處であります。しかも、此の中にあつて、その生活樣式が、八方からおびやかされながら、依然として舊態を續けつゝあるものは、實に、現代婦人の生活そのものであらうかと考へられます。

都會生活者としたところで、たいした違ひは無いことでありますけれども、それでも、都會婦人の生活の如きは、たま〳〵有產階級にあつては散歩の時間だとか、觀劇の時間だとか、乃至書見の時間等を持ち合せないことはない、けれども農村一般の婦人の生活を眺め、親しくその狀態に接してみますと、實に極端なものでありまして、百年、數百年前の、生活そのまゝを踏襲してゐると申

して差支へないのであります。今、私は都會の有産階級の婦人の持ち合せたる處の若干の暇について申しましたけれども、然うした側は、申すまでもなく僅少な數を示すのみでありまして、恐らく都會生活を營む婦人としたところで、九〇パーセント、此處に述べやうとする域を脱してをらないことゝ存じます。卽ち、髮容ちだとか、衣裝だとか、乃至化粧の爲しやうだとか、さういふた生活の末葉に屬する側のものこそ、日に月に變つていつてゐると申しても間違ひは無いでありませう。事實、私共がこの大阪市街に見るとしましても、又、東京其他、必ずしも市街地ばかりではない、田園の間に見るとしたところで、すさまじい變り方をしてをります。

然しながら少しも變つて居らない處のものがある。それは何かと申しますと、炊爨の事、育兒の事、裁縫のことであります。田園生活者にとつては猶之れに加ふるに、最も勤勉ならざるべからざる處の耕耘の一事があるのであります。只今申す如く、髮容ちが變り、衣裝が變り、裝身具が變つてゆく、さうした變りかたの烈しいだけそれだけ、依然たる舊態にある處の炊爨の事、育兒の事、裁縫の事、乃至耕耘の事は、耐へ難くおびやかされてゆくのであります。卽ち社會の進運に反比例して恐畏を感ぜしめられることになるのであります。であるからして、當然の赴くところとして此の境地から脱却しやうとした幾多の婦人がありました。否、現在、都市田園と云はず眼を轉ずれば卽ち其處に、この舊態から脱却しやうとしてもがいてゐる人々が渦を卷いてゐるのであります。今私が言ふとか、誰が言ふとか然うした人物の誰たるに拘らず此の問題は、どなたにしても直ちに肺肝を突くことになるだらうと思ふのであります。然ういふことであるが爲めに、今更らではない。既往の長い歳月に於て、すでに幾多の君子は之れを救はうとして、或は書籍に說き或は口に說いたのであります。宗教に於て說くところの如きは、最も明瞭にその一つとして見得ることが出來るのであります。

けれども如何なる哲人、如何なる君子が力說これ力めたところで、社會現象の事實は、いよ〳〵ます〳〵、反對の方向をとつてまことに險惡に深刻を極めてゆくばかりであります。これはさうあるのが當然であると私は思ふのであります。何となれば、婦人にとつて、炊爨の事にしても、育兒の事にしても、裁縫の事にしても、乃至また田園生活者にとつての耕耘の事、それ等は、根本に於て、何時如何なる時代が來たところで、解消すべき事柄ではないからであります。地球上の人類が絶滅するやうな場合があつたならばいざ知らず、太陽東から出て西へ沒し、これを眺むる人類の存續せんかぎり永久に婦人に與へられたる天職であるからであります。

こう申すと、今、社會の先端を行かうとしてゐる側の婦人方にあつては、或は腹立たしく思はれ

る方も尠くなからうかと考へられます。けれども、事實上、こゝろみに然ういふ婦人がたの衣をへだてた胸をひろげてみるとなると、其處に幼兒の唯一の糧たる乳房がまさしくあらはれて來せうま。この一事に鑑考したところで、理論を超越した分明なものが發見出來やうかと私はおもふものであります。

さういふ次第でありますから、爰に私が申す處の婦人の天職に對して之れを一蹴しやうとし、之れを他へ轉ぜしめやうとしてあせるのは、所詮徒勞に終るのが當然のことゝ、私は考へるのであります。

其處で、私は思ひますのに、さうした婦人の立場にあつて之れは永久に救ひ得べからざるものかどうかと申すと、私は必ずしも然うでないやうに考へます。すなはち、救ひ得べきものが唯一つあると思ふ。それを何かと申すならば、個人々々が必ず所有する處の心であります。この心の綱による外、絶對に有り得べきものではないと云ふことを私は信じます。

今、都會の喧噪に追はれたる一人の旅客が電車軌道の安全地帶にたつて、おびゆる心をかき抱いてゐることゝ假定します。私はその旅客に、仰いで薄雲の間を走る明月を指したいと思ふ。今又、工場に勤務して汗にまみれた女工に指して、窗に遠く風に搖られてゐる一莖の草花をしめしたいと思ふ。如何に機械文明におびやかされ、如何に勤勞に耐へ難い人達にしたところで、さうした碧天の明月に心を向け、清澄な秋風に搖られる草花を眺めたとき、一瞬一瞥の間でも、必ずや心をなぐさむる處のものがなくてはならぬことゝ信ずるのであります。この點は、苟も普通の人間として世に生を享けた者である以上、誰にも共通する處であらうと私は思ふ。

而して、其處に果して一瞬の間でも、月を美しいと見ることが出來、草を麗はしいと感ずることが出來たとしたならば、此處にこそ前述の問題に觸れて沈思默考せしめられる處がなければならないと思ひます。急迫、上述な場合であつてさへも心に一滴の甘露を與へる處のものである以上、日常炊爨に從ひ、育兒に從ひ、而して又耕耘に從ふ間に於てをやと申したいのであります。月や草花にかぎらず、自然界の總ての物象は、何時如何なる場合に於きましても、人間それ自身が一瞥をそゝぐことを吝まざる限り、必ず公平に、必ず平等にその美しい姿を赤裸々に示すのであります。而して、この大自然は、千年二千年の太古に於ても、未來の如何なる時代に於ても、時の流れに從つてその美しい姿を現ずることに於て決して變ることはないのであります。

そこで私は、農村婦人にあつては耕作の間に行雲流水をながめ、都市生活の婦人にあつては、厨窗の時雨に一瞥をそゝぐことを忘れざるやう强調したいのであります。さうして此處に次第々々に

深く美感を求めて、心に優秀な詩的觀念を養ふことをおすゝめしたいのであります。

我が俳句道の第一歩は、そも〳〵この容易なる階梯からはじめられてゆくのであります。私はこゝに容易なる階梯と申しますけれども、この容易にして卑近なる詩の道を、ものに譬へて申すならばそれは足疲れたる旅人にとつては路傍に横たはる一つの伐株であつて、こゝろおきなく腰かけて憩はしめます。路ゆく處の餓ゑたる者にとつては、枝を垂れたる一個の林檎であるのであります。卽ちとつて心易く胃の腑を滿たすことが出來るのであります。佛教に於て說き、耶蘇教に於て說くところの宗教の道を私は毫末も否定しやうとするものではありません。然しながら、今現に、路に餓ゑ、行くに疲れたる旅人にとつて、輝いたる高臺の美酒佳肴が、餘りにはるかなることを感ずることに於て、より卑近な、より容易なる、路傍の伐株、枝を垂るゝ一個の林檎を指すことの切實さを私は痛感する者であります。

此れを譬へて、一個の林檎と云ひ、路傍の伐株と申しますけれども、俳句道として此の自然觀照の心法によるところの道は、幾多の實例に於ていよ〳〵はつきりと皆さんに合點していたゞけることゝ存じます。

臺灣に齋藤東柯と云ふ俳人がありまして、長く私の主宰する雲母へ句を寄せて居りました。非常に熱心な方で始終立派な作を寄せつゞけてゐたことでありましたが、遂ひ先年胃癌の爲めに果敢なく長逝されました。この頑固なる病氣に惱まされてゐた東柯氏は、終焉に近づくに從つて醫藥もたのむに足らぬことを知つてます〳〵强い信念のもとに句作にたよつたのであります。その句作によることは病床に呻吟する東柯氏として唯一の心の慰安であり、宛然溺れんとする者が投げられた綱にすがるやうな狀態にあつたのであります。こゝを詳細に述べたいと思ひますが、其の餘裕がありませんので、實際の作句を一つ二つ擧げてみます。

起き直り着せてもらうや單衣物　東柯

晝蚊帳や日に〳〵食の減るばかり　同

といふやうな句をのこしてをりますが、如實に作者を描いて餘りあるものと思はれます。卽ち、前句は病床にある東柯氏が小康を得た場合でもありませうか、床の上へ起き直つて單衣物を着せてもらうといふ處で、後句は、晝吊つてある蚊帳の中で、日に〳〵食物の量の減じてゆくことを欝々と感じてゐる場合を詠んだものであります。こうして俳句を詠み出すといふことは、東柯氏その人の心に充分なゆとりが有るといふことを誰もが感ずる處だと思ふ。病氣とか死とかいふこと以外に心の懸つてゐることをどなたもが見逃せまいと思ふ。こゝが俳句のお蔭だと云へます。こうした作句

に心を傾けて、せめてもの慰安を得ながら、即ち藝術的解脱によつて救はれながら寂滅に歸して行つた此の東柯氏の姿はお互に句道精進としてのよい教を垂るゝものと私は信ずるのであります。

飜つて申せば、それが唯單に旅人にとつて憩うべき切株であり、餓えたる者にとつて枝を垂るゝ林檎であるものも、此處まで力強いものを示すことになると、俳句による以外の一般社會の人々は恐らく愕然とされることゝ忖度されます。東柯氏は斯様にして亡くなられましたが、病死一年ばかり前に、六人のお子さんを持たれてゐる東柯氏の後妻として迎へられたまし子夫人は、まだ體内にやどつた子供が誕生する前に夫東柯氏の死に際會したのでありました。こういふ慘憺たる事實は、親しい俳人仲間の出來事だけに、世人の前に物語ることさへ遠慮したい私の氣持であるに相違ありませんが、然しながら俳句精進の道を說く上に引き續いて申上げたいことにかゝつて、思ひきつて申述る次第であります。と云ふのは良人東柯氏の病死の後、極度に悲哀のどん底に陷つた夫人まし子さんは、悲哀をひるがへして決然として起つて、俳句道に踏み入つたのであります。

七月十二日逝く夫の通夜

ともしつぎともしつぐ灯や明易し　まし子

かな〳〵の近く鳴きゐる火葬場　同

二七日すぎにし鮎の料理かな　同

といふのは、即ちまし子未亡人の作られたところで、私に寄せて來ましたので私は勿論これをとつて「雲母」の誌上に掲げたことであります。第一句、は夫東柯氏の通夜をされながら枕頭の灯し火を何度となくともし次ぎともし次ぎしてる中に、夏の夜が曉け易く、いつしか東雲が白らんで來たといふ情景、第二句は、東柯氏の骸を火葬にして歸らうとする場合か或は骨上げに行つた場合とかに、火葬場近く鳴いてゐるかな〳〵蟬の哀調が強く心を打つてひゞきわたるといふことを詠んだもので、これなどは眼前の事實をその儘に受け入れて一句としてまとめてゐるのであるけれども初學者の作と思へないほどの強い迫力を感ぜしめるものであります。第三句は佛に對する二七日が過ぎて、よく世間に行はれる處の所謂精進落しの料理をこしらへた、其れがたま〳〵鮎の料理であつたといふ場合を詠んだものであります。

亡き良人の子供を腹にやどして、その子供の誕生をも見ずに死んで行つた東柯氏を思ふ切々たる情は決して消ゆべきではありますまい。その場合にたつてまし子夫人は恁うした俳句道に憑りすがることによつて、自分自身を今、現在暗い境から明るい境へ引き上げやうとしてをるのであります

いや、實際こうした俳句を制作されたこと自體は既に、明るみへ正に乘り出してゐることを證據だ

て〻餘りあることであります。

話を簡明づけんが爲めに、敢て非常な實例を私は爰に申述べましたが、こうした非常時に於てさへも人心の安定を得せしむることが、如何に常住坐臥、俳句道精進にいそしむことによつて、お互ひ心の安定を保たしめ得らる〻かを判斷されやうかと深く信じて疑はないところであります。

（昭和七、一、二二大阪放送局に於いて）

珊々たる詩涙

先年、當所から俳話いたしました場合は、慥か「現代婦人の生活と俳句」といふやうなことだつたと記憶いたしますが、今回はやはり旅に出てをることに思ひつきまして、俳句といふ文藝と旅行といふことを、手みぢかに文人心境の根本問題にむすんで簡明に申述べてみたいと存じます。

元祿の俳聖と云はれる松尾芭蕉といふ俳人が、始終、旅から旅をつゞけてをつたことは、餘りに有名なことでありまして、恐らく現代の常識と申しても差閊へないくらゐ人口に膾炙したところのことであります。その芭蕉が、書き遺した紀行文の中に「おくの細道」といふ最も秀ぐれた一篇の文章があることは、これも既に知れわたつたことでありますが、この「おくの細道」の冒頭に、こういふことが書かれてあります。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて

老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。」

といふのであります。これは、むづかしく解釋するとなれば、深遠な哲理をひそめてゐて、まことにむづかしい解釋を要するわけになるのでありますが、簡潔に解釋を下すとすると、――光陰なり、人生なりを旅人と見做して、旅行ずきの芭蕉その人が、自分自身の氣持ちを克明に表白したといふに外ならない、面目を後世に垂れた一代の名文章であるのであります。又、同じ芭蕉は、やはり、これも有名な紀行文の一つであるところの「甲子吟行」といふ文章のはじめに、

「貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程、風の聲そゞろ寒げなり」として、

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな　芭蕉

といふ句をしるしてあります。

この「野ざらし」といふことは、彼の一休和尚が錫杖の頭へのつけて歩いたと、巷間に言ひ傳へられてゐる髑髏のことでありまして、これから旅立つてゆく自分自身の心頭に、行きくれて或は髑髏にならぬ限りもない、その影を思ひ浮べるとなると、そゞろに吹きすさむ秋風が身にしみわたることである、といふ意味を持つものであります。然ういふ意味に解釋してみますと、いさゝか誇張し過ぎた大袈裟な感があるのでありますが、一面、自動車にも飛行機にも、來り得なかつたその當

時の、旅人としての氣持ちに、馬耳東風視しがたい、眞劍な或るものが心を打つことも慥かであります。

芭蕉の場合を、これから後にも成るべく多くとり入れて、この俳話を果たさうと思ふ次第でありますが、こんな風に、芭蕉といふ人は、旅人といふことに就いては、徹底的にその境地に浸りきつて行つた人でありまして、後世に遺したところの此の文稿、すなはち躬自ら言ふところと、その行ひとが、ぴつたりと一致してをつて、寸分の隙も存せしめなかつたのであります。言葉を換へて申せば、唯今「奥の細道」から抽出した文章といひ、又、「甲子吟行」から、とり上げた俳句と云ひ、此等は、その一端にすぎないものでありまするけれども、眞實こうした文脈の延長に於いて、芭蕉全生涯を貫ぬく詩文の、全面容に接せしめられるわけになるのであります。

芭蕉の言葉に照らすまでもなく、凡そ、古今東西を問はず、旅行といふことは、人間の生活することに鑑みて、盡きせないふんだんの變化を示すといふ點から云つても、重大なる關心事であるに相違ないことでありまして、殊に、詩歌、文藝に沒頭する側の人々が搔き抱いた、感傷的な心頭に響くことの異常たることは申すまでもないことであります。私ども、少年の頃に讀んだもので有まして、全體の記憶は仄かでありますが、鷗外漁史によつて譯された、デンマルクの詩人アンデルセ

ンの「卽興詩人」"Improvisatoren"——1835. これは可成り社會全般に亘つて讀まれてゐることゝ思ひますが、この「卽興詩人」の中の或る部分に、旅人アントニオがはじめて地中海の青みどろの海に接したことが書かれてあつたやうに思ひます。旅人は灼々たる日光に照らされて、瑠璃板のやうに盛り上つた海面を眺めて、ぼろ〳〵と涙を流しながら、磯邊の芝草に膝をついてしまうのであります。この涙たるやまことに不思議のものゝ如く思はれたのでありまして、少年の頃の深い印象が、今日尙薄らぐことなしに、心にとゞめられてをるのであります。

この旅人の涙は、どういふ涙であるかと云ひますと、手つとりばやく簡潔に申上げるならば、大自然のふところに、ぬく〳〵と搔き抱かれて、極度の美觀に浸りきつた心境を物語るところのものでありまして、芭蕉をして云はしむるならば、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは、日々に旅にして旅をすみかとす」であり、又、

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな　芭蕉

であり、更に又、

あか〳〵と日はつれなくも秋の風　芭蕉

と、いふて少しも差閊へないところのものであらうと私は信ずる者であります。同時に又、こうした場合に於ける、魂をゆすぶつて出た古今の傑出した詩歌は、個々夫れ〴〵に共通すべきだと信ずるのであります。芭蕉に於きましては、芭蕉といふ詩人の詩的教養が、玲瓏たる玉の涙をば、盛つてさうして、あらゆる傑作としての作品そのものに、當てはめたことでなければならぬ筈であります。姑らく俳人を離れて、近代歌人の例に照らしましても、故人若山牧水の場合などに觀ますと牧水もよく好んで旅をしたのでありますが、青年期の旅行中の作品に、

幾山河越えさりゆかばさびしさの果てなん國ぞ今日も旅行く　牧水

と、いふのがあります。これは、先年故人を追慕する歌人だちが寄つて、故人を記念するために沼津の松原に建てた歌碑に刻されてをるので、多くの方が御承知かと思はれます。これなどもやはり同じ心境から、作者牧水にとつて壓へんとしても壓へ難く、ほとばしり出たものであるに違ひないのであります。尙、同時代の歌人で、これも今は故人の數に入つた石川啄木の、人口に膾炙した作品に、

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる　啄木

と、いふ有名な短歌がありますが、これなどにしましても矢張り同じことが言へるのであります。

こゝを強調する意味で、疊んで芭蕉の例をとり上げてみますと、やはり「奥の細道」に、

「千住といふ處にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ」として、

ゆ く 春 や 鳥 啼 き 魚 の 目 は 涙　芭　蕉

といふ著名な作があります。又「芳野紀行」の如きでも、「神無月の初め、空定めなきけしき、身は風葉の行方なき心地して」として、

旅 人 と 我 が 名 よ ば れ ん 初 しぐれ　芭　蕉

といふ、これも世人に知れわつた名作が遺されてあります。

こういふ風に、詩人にとつて、詩歌としての作品が凝つて玉をなすところのものは、決して所以ないものでは無いのでありまして、只今「卽興詩人」にあげた場合のやうに、心に深く詩的教養を藏する者にとりましては、旅をつゞけてをる場合自然の澎湃たるものに直面して、感激に滿ち〳〵た結果、心おのづから、詠むまいとしたところで詠まないではゐられない氣持ちが一杯になつて、そこに生命的な作品が產み出されるのであります。卽ち「卽興詩人」に於ける場合の、何となしにぽろ〳〵と涙が流れて仕樣がない、その玉なす涙は、傑出した詩人にとつては、必ずや、優秀な詩的作品のかたちとなつて現はるべきであるといふ理論が構成さるべきであります。此處は我々俳人が俳句といふ文藝にたづさはつて、生涯を貫らぬかうとする心の上に、非常な重要性を常びて、投げかけられるところのものでありまして、唯單に、これを旅人芭蕉が旅の句を產むに不思議はないとして、輕々に看過し難い深甚の文藝的な意味を含んでゐるものと私は思ふのであります。

眼を展じて一般文人間を眺めましても、詩歌をめざして、千里二千里の旅を辿り、或は奥の細道のあとを尋ねて旅するむきさへ決して尠くないことは申すまでもありません。ところが、さういふ總ての人々が、果してよく旅の心を心として、眞に芭蕉のさうした心境に一致し得る程度にまで据はりきつたものがあるかどうかとなると、中々容易くは同じ難いところであります。旅の心を心とすると云ふことは、我々の俳句的制作の上で、一つ言葉を換へて申すならば、古い文献「大學」を見ましても「日に〳〵新たにして又日に新なり」とある其處の消息に觸れてゐるものでありまして しばらくも停滯するところないことを心髓とせなければなりません。苟もせない藝術精進の毅然たる心の相を、自然といふ大いなる鏡の眞澄に置いて、須臾も弛緩することのない藝術的な覺悟をもつ基礎でなければならぬと私は信ずるものであります。

比喩をとつて申してみますと、巷間のドブ川は常に濁り、山間の溪流は絕えず清淨としてゐます

が、これが不潔であると清淨たることの根本的な違ひは、實に、水そのものが淀むことゝ、常にほとばしり流れることに起因するものでなければならないのであります。芭蕉のやうな天分豐かなる詩人にしたところで、常に汚濁に安住し、町川の淀むが如く、心の淀んだ生活域から詠みいづるところのものであつたならば、決してあのやうな立派な作品が多く產まるべきでなかつたと私は思ふのであります。

さて、然ういふことになつてみますと、此の問題は、たゞ單に旅行といふことゝ俳句文藝に就いてのみの、問題としてばかり考へられない筈であります。と、申すのは、前に一寸觸れて申し上げたやうに、芭蕉といふ人の全生涯が、旅行から旅行の一大聯續でありまして、その作品の傑作といふ傑作が、その全生涯を貫ぬく詩文の全面容を髣髴し、これが輝かしい大いなる詩的生活の背景をゑがくところのものであるとするならば、われ〳〵の生涯を賭す處の俳句文藝なるものは、すべからく此の點にかゝつて、常に自然風物の新らしさを迎へ、これが心奥に深く感じ入つてから、所謂旅の心を心とする抵に、玲瓏たる制作を產むの用意に缺けてはならないと云ふことに思ひ到らねばならないからであります。で、ありますから、これを對蹠的に申しますと、現今の我が俳句界に於きましては、教養ある無數の俳人が、いづれも皆、芭蕉以上の自意識をもちまして、咳唾みな金玉抵に、矢繼早な名作濫發に力めてゐるのであります。といひますと、現俳壇諸氏の氣色をそこなふものがないとも限りませんが、事實そのやうなあんばいであるのでありますが、寔に不幸にして、その持ち合せた教養は、詩歌作品の上に美辭麗句を重ねることは知つてをります。一見まことに氣の利いた作品を產むの手法は心得て居るのであります。然しながら、その矢繼早なる名作濫發の過程は、兎角に、旅の心を心とすることなき、安易なる心境を物語るものでありまして、斷じて、山川の清流を比喩すべきものゝ餘りに尠きを嘆せざるを得ない次第であります。すなはち、謂ふ所の机上制作の病弊が甚だ多く見受けられるかの現狀にあるのであります。

飜つて申しますと、元祿人としての作家、彼等の制作が、甚だくすぶつたものであるに相違ないにしたところで、而もよく千載のもと、人心を深く打つところのものがあるのは、これまでに申述べた心境の差が然うせしめるものでありまして、當今の、濫發される作句作品が、いかにも近代的であり、氣が利いてをり、美辭麗句に富んでをるにも拘らず、まことに人心を打つ響きに於いて微弱たるをまぬがれないのは、所以なきに非ずと、遺憾ながら思はれる次第であります。

最後に尙一とこと附け加へて置きたいと思ふのであります。其れは、俳句に對して、旅の心を心とすると云ふことを申して、この俳句講話の大部分を費して來てをりますが、この事は、必ずしも

現代の生活に於いて、風羅坊のそれのやうに、一杖一笠漂々浪々の旅をつゞけて、作句することでなかつたならば優秀なる作品を贏ち得べきものではない、といふやうにお聽き取り下さる方はなからうことを信ずるものであります。何となれば、我々が、如何様にもがいたところで、太陽西より出づると雖も、所詮、既往の芭蕉の時代に戻り、芭蕉それ自身たることは得難いからであります。同時に又、われ〳〵は、芭蕉より四百年をへだてゝ、いま現在、まがうかたなく現代に生をうけ、現實に直面する以上、この生活に眞實眼を蔽ふことは出來ないのであります。ひとたび身を起せば現んにそこに元祿びとの見も識りもせなかつた飛行機が空を翔けてをりますし、自動車が疾風の如く我々を運こんで旅をつゞけさせてくれるのであります。又、現んにこうした大阪放送局に居つて全國の俳句に關心を持たれる人々に呼びかけ得るといふ、こんな幸福にお互ひがめぐまれ得る現代であるのであります。こんなことは芭蕉が如何に名句を吐いたところで、又「夕立や田を三めぐりの神ならば」といふ句を詠んでから、たちまち夕立を降らせたと巷間に云ひつたへられてをる其角にしたところで、恐らく夢にだに見られ得なかつたらう處のものであります。われ〳〵が、こういふ時代に生を享けてゐる人間としまして、時代的に左様な隔りがあるやうに、矢張り心の裡に於きましても、相當な隔りがあることは自然の理であります。其處に、旅の心を心とする意味に於きましても、當然なる現はれとして近代性を認めざらんとしても得ない結果になるのであります。今の文藝全般が當面してゐるところの根本問題にしても、つまるところ其處にかゝつてゐはすまいかと私には思はれるのであります。

「奥の細道」に於ける河合曾良の吟に、

夜もすがら秋風きくや裏の山　曾良

と、申すのがあります。これに就いては、時間が足りませんので、つまびらかに申述べることが出來ませんけれども、往昔の詩人たる旅人の作として、私はこれを愛誦するに足るものだと信じてをることだけを申述べておきます。しかし、さうは申すものゝ、この作の甚だ鈍い響きをその儘に自作の場合として滿足し得るものではありません。たゞ、旅の心をもつて心とするところの、さうした古人の精神的なる道筋——詩的傳統を肯定するに吝かなものでないといふことを明瞭に申述べ得る自信を持つものであります。（昭和一〇、四、四。大阪放送局に於いて）

昭和十年十二月五日印刷
昭和十年十二月十一日發行

俳句文藝の樂園

定價金二圓

著作者　飯田蛇笏

發行者　飯尾謙藏
東京市小石川區江戸川町十八

印刷者　萩原芳雄
東京市牛込區山吹町一九八

不許複製

發行所　交蘭社
東京市小石川區江戸川町十八番地
振替東京四〇二七九番
電話小石川(85)三一五一番

飯田蛇笏先生著

近代句を語る

優れたる句評は優れたる俳人にして初めてよくなし得る處であり。適確なる批判は直に讀者の心眼となり心糧となる

▽本書は内容を一、近代俳句關心錄。二、高濱虛子の句を拾ふ。三、長谷川零餘子の三大項目に分ち、著者が多年俳句文學に傾注せる蘊蓄の批評眼に照して、放奔華麗、縱横犀利の筆を呵して思ふがまゝに批判檢討されたる俳壇稀に見る好適書であります。

（第一）　は近代俳人の作句をひとつびとつ俎上にして、剔抉餘すところ無き評講は、句道に參じ句作に勤しむ諸君には絶對的の好讀書であり旦つ缺くべからざる良參考書であると確信いたします。

（第二）　は巨匠虛子翁の俳句に對する當代無二の批判者たる著者の忌憚なきこの評言こそ、まことに我れ等が傾聽に値ひするもの深きを信じます。

（第三）　の零餘子に關する長文は傑物たりし零餘子を親疎兩面の玻璃鏡に照して、子の全貌を描くと共に、子が俳壇に印せる心證的の諸點を赤裸々に物語る俳句人の興味津々たる好讀物であります本書こそわが俳壇の一大收獲書として、俳句人は勿論、一般文學を語る人々の机上を飾る第一書と好評さるゝであらう。是非御一見あらむ事をお願いたします。

＝四六版總上布特上製本函入定價金一圓五十錢送料十二錢＝

交蘭社發行

693
109

4年 1月22日

東京帝國大學
閲覧済

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black